

理学療法学科 夜間部

理学療法学科夜間部 1年 (令和2年改定 教育課程)

	科目	講師名	ページ
基礎分野	心理学	小野寺 哲夫 92
	導入演習	阿部 靖・木下 修・土手 延恭 93
	人間関係学	阿部 靖・河邊 宗知・若井 索 94
	情報科学	篠田 良平・阿部 靖 95
	基礎演習	土手 延恭・阿部 靖 96
	保健体育	小平 健太郎 97
	英語	桑島 泰輔 98
専門基礎分野	解剖学 I	五十嵐 広明 99
	解剖学 II	五十嵐 広明 100
	解剖学 III	五十嵐 広明 101
	機能解剖学 I	鈴木 章規 102
	機能解剖学 II	鈴木 章規 103
	生理学 I	村上 卓也 104
	生理学 II	村上 卓也 105
	生理学 III	小平 健太郎 106
	生理学実習	飯村 佳織・高瀬 慎輔 107
	運動学 I	鈴木 雅男 108
	運動学 II	鈴木 雅男 109
	人間発達学	大山 敬子 110
リハビリテーション医学概論 I	草野 修輔・工藤 征四郎・佐々木 和裕 111	
専門分野	病態運動学	畠山 敦 112
	運動療法学 I	畠山 敦 113
	総合演習 I	夜間部教員 114
	検査測定法 I	塩澤 和人・鍋城 武志 115
	検査測定法 II	塩澤 和人 116
	理学療法概論	理学療法学科教員 117
臨床見学実習 I	理学療法学科教員 118	

理学療法学科 夜間部 2年（令和2年改定 教育課程）

	科目	講師名	ページ
分 基 礎	自然科学（物理学）	野村 崇 119
	運動学実習	有本 邦洋 120
	解剖学IV	塩澤 和人・他 121
	病理学概論	アブドゥカディル イマムハサン 122
	臨床心理学	小野寺 哲夫 123
	内科学老年学 I	本間 博 124
	内科学老年学 II	本間 博 125
	整形外科学 I	渋谷 一行 126
	整形外科学 II	渋谷 一行 127
	リハビリテーション医学概論 II	工藤 征四郎・佐々木 和裕 128
神経内科学	斎藤 史明・真先 敏弘 129	
小児科学	江添 隆範 130	
精神医学	大高 靖史 131	
専 門 基 礎 分 野	検査測定法 III (整形外科)	塩澤 和人・鈴木 雅男 132
	検査測定法 IV (反射)	土手 延恭 133
	検査測定法演習 I	塩澤 和人・鈴木 雅男 134
	検査測定法演習 II	塩澤 和人・鈴木 雅男 135
	総合演習 II	鈴木 雅男 136
	疾患別理学療法 I - A	米村 豊・阿部 靖 137
	疾患別理学療法 III - B	斎藤 雄 138
	運動療法学 II	畠山 敦 139
	物理療法学	小川 博史 140
	日常生活活動学 I	塩澤 和人・篠田 良平 141
	理学療法研究法	斎藤 雄 142
	理学療法技術論 III	畠山 敦 143
	理学療法技術論 IV-A (PNF)	水口 健一 144
	臨床見学実習 II	夜間部教員 145

理学療法学科 夜間部 3年（平成28年改定教育課程）

	科目	講師名	ページ
基礎分野	医学倫理	阿部 靖・千田 佳遠里・理学療法学科教員	146
	情報科学Ⅱ	理学療法学科教員	147
	小児科学	江添 隆範	148
専門分野	理学療法研究法	斎藤 雄	149
	義肢装具学Ⅰ	木下 修	150
	日常生活活動学Ⅱ	塩澤 和人・篠田 良平	151
	疾患別理学療法I-A	米村 豊	152
	疾患別理学療法I-B	米村 豊	153
	疾患別理学療法II-A	鈴木 雅男	154
	疾患別理学療法II-B	重國 宏次	155
	疾患別理学療法III-A	有本 邦洋	156
	疾患別理学療法IV-A	塩澤 和人・鍋城 武志	157
	疾患別理学療法IV-B	塩澤 和人・高瀬 慎輔	158
	疾患別理学療法V-A	山本 紘靖・黒木 光	159
	総合演習III-A	夜間部教員	160
	総合演習III-B	夜間部教員	161
	理学療法技術論I	畠山 敦	162
	理学療法技術論II	若井 索	163
	理学療法技術論V	鈴木 雅男	164
	地域理学療法学	下村 周平	165
	生活環境学	望月 彰也	166
	臨床技術論	理学療法学科教員・外部講師	167
	臨床実習I	理学療法学科教員	168

理学療法学科 夜間部 4年（平成28年改定教育課程）

	科目	講師名	ページ
専門分野	専門基礎医学演習	外来講師	169
	義肢装具学Ⅱ	木下 修	170
	総合演習IV A~D	夜間部教員	171
	臨床実習II-A	理学療法学科教員	172
	臨床実習II-B	理学療法学科教員	173

科目	心理学	単位・時間数	1単位・ 15時間
担当講師	小野寺 哲夫	学 年	1年生 期
実績経験	資格 公認心理師・臨床心理士 Ph.D	神奈川県藤沢市教育委員会学校教育課所属学校訪問相談員として4年間、文科省認定スクールカウンセラーとして、神奈川県海老名市（8年）、大和市（3年）、鎌倉市（3年）の小中学校にて、児童生徒、保護者、教員の相談、およびカウンセリング、管理職に対するコンサルテーション等に従事してきた。2020年には国家資格公認心理師を取得。これらの実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う。	

授業の位置づけ	心理学は、全ての医療専門職の基礎となる学問のひとつである。心理学では、科学としての現代心理学が、誕生以来この100年間、どのようなことを研究してきた、どんなことが明らかになってきたのかなどについて、有名な心理学実験などを紹介しながら心理学の面白さや魅力が伝わるような解説を行う。また、この授業は、講師による一方通行的な講義だけでなく、できる限り貴重な映像を観たり、心理テストを行ったり、お互いにディスカッションしたりしながら、アクティブラーニングの視点に立った参加型の授業を展開していく。また、OT/PTの国家試験を見据えて、高頻度で出題される分野を手厚く授業していく予定である。		
到達目標	PTの国家試験を見すえながら、心理学の基礎知識を理解する。心理学の全体像を理解し、さらに人間の発達段階における特徴や人間理解の基礎的知識を習得する。		
授業形態	講義・演習	遠隔授業	

授業計画

回数	項目	講義内容	
1回	心理学研究法と歴史	心理学とは何か？ 心理学研究法と心理学の4つのパラダイムについて	
2回	知覚心理学①	精神物理学の基本と奥行き知覚、運動知覚、反転図形など	
3回	知覚心理学②	ゲシュタルトの法則と注意のメカニズム、錯視図形など	
4回	学習心理学①	古典的条件づけ ワトソンの恐怖条件づけ ガルシアの味覚嫌悪学習	
5回	学習心理学②	オペラント条件づけ シェイピング 強化の原理	
6回	学習心理学③	社会的学習理論と行動療法 発達心理学（エリクソン、ピアジェ、ユング）	
7回	記憶心理学①	短期記憶（ワーキングメモリ）、長期記憶、展望記憶、プライミング、忘却説	
8回	記憶心理学②	神経心理学における記憶過程（即時記憶、近時記憶、遠隔記憶、）、記憶障害	

成績評価	筆記試験（90%）、毎回のミニレポート課題（10%）で評価する。	受講上のルール・留意点	毎回のミニレポート課題は、授業で学んだ内容について、感想や自分の意見、質問等を比較的の自由に書いて提出する。毎回の授業と試験において、教科書は必ず使用する。
------	----------------------------------	-------------	--

課題やレポートに関するフィードバック

原則としては、毎回のミニレポート課題についてのフィードバックは行われないが、必要に応じて行う場合もある。

	書名	著書名	出版社名
教科書	PT・OTのための心理学テキスト	小野寺哲夫	JFAパブリッシング
参考書	はじめてまなぶ行動療法	三田村仰	金剛出版
オフィスアワー	「授業前後の休憩時間」		

科 目	導入演習		単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	土手 延恭／阿部 靖		学 年	1年生 前期
実績経験	資格	実務経験 17年 整形外科急性期・慢性期・外來リハ、通所リハ・訪問リハ・介護予防教室運営を経験、現在非常勤として整形外科クリニック・有料老人ホームでの臨床業務を行っている。その現場での実務経験を踏まえて講義・演習を行う。		
	理学療法士			

授業の位置づけ	<p>理学療法士の働く臨床現場では、他職種（医師・看護師・作業療法士・言語聴覚士・ソーシャルワーカー・ケアマネージャー・医療事務・管理栄養士・薬剤師・介護福祉士・社会福祉士・看護助手など）との連携が欠かせない。それぞれの職種が患者や利用者様の治療目標・介護目標等に向かって仕事をしている。それぞれの専門家が協働することでチーム力が高まり目標が達成できるため、お互いの仕事の進み方などを知る必要がある。</p> <p>まず自分のことを知り、できる範囲で自分を開示し、相手の立場や思いを尊重する態度を養う。前期から専門基礎を学び、同時にグループワークを通して、合意形成する過程を経てチームで連携することを学ぶ。また合意形成した内容からグループで発表することも学ぶ。</p> <p>見学実習に向けて学び、臨床現場で理学療法士がどのように働いているのか意識できるように、様々なグループワークを通して多角的な視点（他者の視点）や思いがあることに気づける態度を養う。</p>			
到達目標	<p>1. 提出期限を守り提出物を提出できる。 2. グループワークを通して思考・創造し、記述・口述できる。</p>			
授業形態	講義・演習		対面授業	

授業計画

回数	項目	講義内容	
1回	自尊心/時間の使い方	自尊心・患者の時間・理学療法士の時間	
2回		自分の時間：スケジュール管理	
3回	自分を知ること 相手を知ること	自分を伝えること（自己紹介・ヒストリー曼荼羅）	
4回		相手から聞き出すこと（病歴聴取）	
5回	考えをまとめること (1) 学習の一手段	マインドマップ①	
6回		マインドマップ②	
7回	考えをまとめること (2) 学習の一手段	マインドマップ③	
8回		マインドマップ④	
9回	考え方をまとめること (3) 学習の一手段	マインドマップ⑤	
10回		マインドマップ⑥	
11回	思考の柔軟性を高めること・視点を変えて捉えること	スマホの使い方	
12回		行動の分類・大切なものは何か	
13回	チームで協力する力	土木設計①	
14回		土木設計②	
15回	まとめ	自尊心②／スケジュール管理／理学療法士の心構え	

成績評価	レポート課題50% 発表50%	受講上のルール・留意点	1. 提出期限が守れない場合減点となる。 2. グループワーク中心に講義を行う。全メンバーが 一人一人の意見を尊重する態度を求める。 3. それぞれの発表までの積極的なグループへの貢献、 積極的な発言を求める。
------	--------------------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック			
グループワーク中は、机間巡回中に実行。またリフレクションシートには、質問欄を設けているので、その記載に合わせてフィードバックを行う。疑問・質問に関しては、メールで随時対応、時間外にも対応する。			

教科書	書名	著書名	出版社名
参考書	配布資料		
オフィスアワー	研修日(火曜日)、午後から出勤(教員室滞在) メールでの連絡は随時 n-dote@nichireha.ac.jp		

科 目	人間関係学	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	阿部 靖・河邊宗知	学 年	1年生 前期
実績経験	資格 理学療法士・作業療法士	実務経験 総合病院・整形外科クリニック・老健・訪問リハ・デイケア・教育機関	経験年数 21年

授業の位置づけ	<p>この授業では自身と他者の関係性を探求する。社会人として医療人として理学療法士として医療福祉現場で求められる倫理感、コミュニケーションスキル、行動規範を理解し、説明できるようになることを目的とする。幅広い分野で医療を実践するために、情意面について深く理解し、行動規範を探求する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 自身と他者の関係性について理解を深める。 2. 状況に基づくコミュニケーションについて理解を深める。 		
到達目標	<p>医療人に求められる倫理観を他者との関係性の中から捉え、説明することができる。 医療福祉現場で求められる接遇を理解し、実践することができる。 医療福祉現場で求められるコミュニケーションを理解し、説明することができる。</p>		
授業形態	講義・演習・実習		併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	医療倫理	医療人の倫理観について
2回	医療倫理	Capbilityについて
3回	医療倫理	プロフェッショナルとアンチプロフェッショナルについて
4回	医療倫理	プロフェッショナルとアンチプロフェッショナルについて
5回	医療接遇	医療現場の接遇について
6回	医療接遇	福祉現場の接遇について
7回	コミュニケーション	コミュニケーションの内容
8回	コミュニケーション	コミュニケーションの手法
9回	コミュニケーション	コミュニケーション実習
10回	コミュニケーション	コミュニケーション実習
11回	EBMとNBM	科学的根拠と感情面に基づく医療について
12回	EBMとNBM	科学的根拠と感情面に基づく医療について
13回	CUREとCARE	医療現場におけるCUREとCARE
14回	CUREとCARE	福祉現場におけるCUREとCARE
15回	まとめ	まとめ

成績評価	レポート課題100%	受講上のルール・留意点	特になし。積極的な発言を求めます。
------	------------	-------------	-------------------

課題やレポートに関するフィードバック

フィードバックは個別または全体に実施します。

書名	著書名	出版社名
教科書		
参考書		
オフィスアワー	メールでの連絡は随時 y-abeb@nichireha.ac.jp	

科 目	情報科学		単位・時間数	1単位・ 30時間
担当講師	篠田 良平		学 年	1年生 前期
実績経験	資格	実務経験 27年 理学療法士として、回復期病院、総合病院、教育機関に常勤として勤務。非常勤として市や区の心身障害者福祉センター・通所センター・保健センターとクリニックにて勤務歴があり、実務経験を活かし実例を交えながら講義を行う。		
	理学療法士			

授業の位置づけ	現代生活に於いて欠かせない事項となった情報操作について学ぶ。最もシンプルな情報の扱いとして聞き取りやメモの取り方から始まり、パソコンを使用したオフィス系プログラムの応用的な使い方を学習する。今後の学生生活でレジュメやレポートの提出、グループワークの結果のプレゼンテーション等、頻繁にパソコンを使用した課題が要求されるのでよく使われる機能を覚える。 授業方法は、プリントとパワーポイントを用いた解説から始まり、実際にパソコンを操作して課題を作成する。パワーポイントの課題で作成した資料を基にグループのメンバー相手に一人でプレゼンテーションを行う。		
到達目標	<input type="radio"/> 情報の概念を再考する。 <input type="radio"/> 今後必要なOfficeの使用方法を覚える。 <input type="radio"/> 個別に複数人相手のプレゼンテーションを体験する。		
授業形態	講義・演習		対面授業

授業計画

回数	項目	講義内容	
1回	情報の概念	情報の概念	
2回	情報の概念	メモとまとめ	
3回	情報の検索	ジャーナル・論文の検索	
4回	Word授業	文書入力、記号入力	
5回	Word演習	文書要約とレイアウト	
6回	Word演習	症例レポートの作成	
7回	Excel授業	家屋図、家系図の作成	
8回	Excel演習	時間割の作成	
9回	Excel演習	時間割の作成	
10回	Powerpoint授業	スライドによる表現方法、見やすい資料	
11回	Powerpoint演習	発表課題の作成	
12回	Powerpoint演習	プレゼンテーション（グループ）	
13回	Office演習	症例情報レジュメの作成	
14回	Office演習	症例情報レジュメの作成	
15回	画像処理	画像処理プログラムの使い方	

成績評価	授業中に作成した課題をUSBメモリに保存して提出：100%	受講上のルール・留意点	パソコンを使った課題が多いので使用方法に慣れるため、可能なら自分のパソコンを持参。 WindowsのOfficeプログラムを使用。 類似ソフトやMAC系Officeでは機能的に足りない場合や互換性に問題が生じる場合がある。
------	-------------------------------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック
演習中に各席を回りながら指導

教科書	書名	著書名	出版社名
参考書	無し		
オフィスアワー	担当授業の前後		

科 目	基礎演習		単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	土手 延恭		学 年	1年生 後期
実績経験	資格	実務経験 17年 整形外科急性期・慢性期・外来リハ・通所リハ・訪問リハ・介護予防教室運営を経験、現在非常勤として整形外科クリニック・有料老人ホームでの臨床業務を行っている。その現場での実務経験を踏まえて講義・演習を行う。		
	理学療法士			

授業の位置づけ	<p>学生は1年前期から解剖学・生理学・運動学といった専門基礎を学び、後期から検査測定法や運動療法学を学んでいく。2年次は、専門基礎知識を基盤に疾患学や他の検査測定法、疾患別理学療法を学んでいく。そのため専門知識の理解が必須である。</p> <p>この授業の前半ではグループワークを通して専門基礎などの医学用語や知識の理解をさらに深める。現在の臨床現場ではチーム医療・他職種連携が必須であり、当然同職種とも連携や報告・連絡・相談が必要である。グループメンバーを尊重しながら相手の意見の傾向、自分の意見の伝達、共同作業などを演習し、必須スキルを高めていく。</p> <p>この授業の後半には学んだ検査測定法を用いて、一部治療を行う。前後にアルコール消毒や身だしなみを整え、臨床現場に即した演習とする。</p>		
到達目標	<p>1. 2年次に学ぶ疾患学・治療学に繋がるよう解剖学・生理学・運動学の理解を深めることができる。 2. 学んだ検査測定法を用いて治療演習を実施できる。 3. 治療の効果について検査を行い、記録することができる。</p>		
授業形態	演習		対面授業

授業計画

回数	項目	講義内容	
1回	運動器（1）	(骨・筋・関節) 解剖学・運動学グループワーク①	
2回	運動器（2）	(骨・筋・関節) 解剖学・運動学グループワーク②	
3回	運動器（3）	(骨・筋・関節) 解剖学・運動学グループワーク③	
4回	神経（1）	運動器確認テスト、(神経) 解剖学・運動学・生理学グループワーク①	
5回	神経（2）	(神経) 解剖学・運動学・生理学グループワーク②	
6回	神経（3）	(神経) 解剖学・運動学・生理学グループワーク③	
7回	神経（4）	(神経) 解剖学・運動学・生理学グループワーク④	
8回	内臓（1）	神経確認テスト、(内臓) 解剖学・生理学グループワーク①	
9回	内臓（2）	(内臓) 解剖学・生理学グループワーク②	
10回	内臓（3）	(内臓) 解剖学・生理学グループワーク③	
11回	内臓（4）	(内臓) 解剖学・生理学グループワーク④	
12回	検査・運動療法（1）	内臓確認テスト、検査・運動療法演習①	
13回	検査・運動療法（2）	検査・運動療法演習②	
14回	検査・運動療法（3）	検査・運動療法演習③	
15回	検査・運動療法（4）	検査・運動療法演習④	

成績評価	確認テスト 60 % レポート課題 40 % 合計 100 %	受講上のルール・留意点	<ol style="list-style-type: none"> テーマごとに確認テストを実施する。 毎日リフレクションシートを記載、期限内に提出すること。 実技では動きやすい服装（基本は短パン、Tシャツ）の準備をすること。その際に臨床業務に影響のある身だしなみはしないこと（アクセサリを外す、長い髪は束ねる等、その他必要に応じてアルコール消毒するなど感染予防に努めること）。
------	---------------------------------------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック
実技演習に関しては、机間巡回中に行う。またリフレクションシートには、質問欄を設けているので、その記載に合わせてフィードバックを行う。疑問・質問に関しては、メールで随時対応、時間外にも対応する。

教科書	書名	著書名	出版社名
参考書	解剖学・運動学の教科書		
参考書	配布資料		
オフィスアワー	研修日(火曜日)、午後から出勤(教員室滞在) メールでの連絡は随時 n-dote@nichireha.ac.jp	※その他、理学療法評価のテキスト参照	

科目	保健体育	単位・時間数	2単位・30時間		
担当講師	小平 健太郎	学年	1年生 後期		
実績経験	資格 NSCA-CSCS, NSCA-CPT, 体育学修士	運動と健康に関わる現実的課題に対して、これまでトレーニングコーチとして運動選手から一般の方への運動指導経験を講義に反映して展開する。保健医療（理学療法・作業療法、看護、臨書検査、鍼灸理療、柔道整復 等）部門で生理学授業を担当している教員が医療従事者に必須な生体機能の調節機構について日常生活からの視点を例示しながら講義を実施する。			
授業の位置づけ	<p>運動の重要性は近年特に呼ばれているが、方法によっては逆効果にもなるリスクも潜んでいるため対象者に合わせた適切な方法を経験則だけでなく知見として習得していくことが専門職としても求められる。</p> <p>また、自身の動作での課題の発見や適した改善を図ることは自身の健康を保つためにも必要である。</p> <p>講義における基礎知識の習得だけでなく演習やグループディスカッションを通じて、多方面から運動や動作について考える時間を設ける。</p>				
到達目標	<p>①動作改善演習を通じて改善のための選択手段を説明できる。</p> <p>②感覚に制限がある場合の運動感覚、運動指導について体験を通して説明できる。</p> <p>③様々なトレーニングの方法、コンディショニングを維持する方法について説明できる</p> <p>④障がい者スポーツの起源や内容について理解する</p> <p>⑤体育・スポーツに関連する課題を説明できる</p>				
授業形態	講義・演習	対面と遠隔の併用授業			

授業計画

回数	項目	講義内容	
1回	コンディショニング	コンディション・コンディショニング概論	
2回	コンディショニング	コンディション把握の演習	
3回	動作改善演習	柔軟性・可動性改善演習①	
4回	動作改善演習	柔軟性・可動性改善演習②：①を踏まえてのグループディスカッション	
5回	障がい者スポーツ①	障がい者スポーツの歴史、競技の理解	
6回	障がい者スポーツ②	障がい者スポーツの疑似体験	
7回	動作改善演習	トレーニングフォームの改善演習：自体重での運動－上半身	
8回	動作改善演習	トレーニングフォームの改善演習：自体重での運動－下半身	
9回	睡眠のメカニズム	睡眠のメカニズム、心身に与える影響	
10回	嗜好品の影響	嗜好品がもたらす影響	
11回	コンディショニング	ウォーミングアップ	
12回	コンディショニング	クールダウン、リカバリー	
13回	アンチ・ドーピング	アンチ・ドーピング活動の理解	
14回	スポーツ全般	スポーツについて改めて考える	
15回	総合演習	運動が身体にもたらす影響についてのまとめ	

成績評価	レポート試験：70%、講義内課題30%の合計100%で評価する。 授業時間数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない。	受講上のルール・留意点	講義を踏まえて運動が身体にもたらす影響について総合的に考察したものを課題として出題する。 講義内では授業課題に沿った課題を出題する。
------	---	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック	
FBは全体に対して実施する	

教科書	書名	著書名	出版社名
参考書			
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

科目	英語	単位・時間数	1単位・ 15時間
担当講師	桑島泰輔	学年	1年生 後期
実績経験	資格	実務経験 20年以上 桑島泰輔：米国呼吸療法士／神奈川県内部障害リハビリテーション研究会 米国呼吸療法士を取得するため、米国に留学経験あり	
	理学療法士		

授業の位置づけ	この授業ではリハビリテーション現場で使用する医学英語を中心に学びます。診療録や検査結果では医療専門用語を英語で書かれていることがあります。多職種と仕事を円滑におこなうためにも用語の理解は重要です。1年次で学ぶ医学用語を中心に、覚えやすいように臨床現場の会話を例を出して説明します。 授業方法は講義が50%、演習が50%である。		
到達目標	各専門領域の知識を学び、その内容を説明できるようになる。 各分野に関心を持ち、調べて、思考できるようになる。 自身らの体験や臨床の実例を通して、幅広い情報収集力と人間観察力を身につけることができる。		
授業形態	講義・演習		併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容	
1回	あいさつ／問診	英単語：専門職名、症状、身体の部位	／ 英会話：問診
2回	姿勢／動作	英単語：姿勢、動作	／ 英会話：基本肢位への誘導
3回	関節可動域テスト	英単語：関節運動	／ 英会話：関節可動域テスト 自動運動・他動運動
4回	関節可動域テスト	英単語：上肢の骨・関節・筋	／ 英会話：関節可動域テスト 頸部・体幹
5回	筋力・バランス	英単語：体幹・内臓	／ 英会話：筋力の測定・バランス検査
6回	歩行・自主トレ	英単語：下肢	／ 英会話：歩行、ホームエクササイズ
7回	RICE・移乗動作	英単語：疾患	／ 英会話：RICE、移乗動作の介助、食事動作
8回	補助具・改修・指導	英単語：疾患	／ 英会話：補助具、トイレ改修、退院時指導

成績評価	小テスト20% 期末テスト80%	受講上のルール・留意点	わからない用語は調べて確認すること。 毎回宿題を課しますので、必ず提出ください。
------	---------------------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック

課題やレポートに関するフィードバック

	書名	著書名	出版社名
教科書	授業資料を配布		
参考書			
オフィスアワー			

科 目	解剖学 I		単位・時間数	1単位・ 30時間
担当講師	五十嵐 広明		学 年	1年生 前期
実績経験	資格	東邦大学医学部教員34年（その内専任講師27年）、 東京保健医療専門職大学リハビリテーション学部教授（1年） 医学部の教員として長年解剖学教育に携わって来た経験を基に、単に解剖学用語を羅列して覚えてもらう講義ではなく、その用語の深い意味合い、用語と用語の関連性などを、独自に作成した講義資料、自分で作成した顕微鏡写真、多くの著書から選んだ画像などを使用して講義を行う。		
	高等学校教諭二級普通免許状理科 中学校教諭一級普通免許状 理科			

授業の位置づけ	神経組織の成り立ちを学習した後、神経系がどのような過程で形成されるのか（発生）を習得する。末梢から中枢（脳、脊髄）に、あるいは中枢（脳、脊髄）から末梢に情報を伝える神経路（伝導路）を念頭に置いて、脊髄から大脳皮質に至る形で講義を進行させる。末梢から脳へ感覺を伝える代表的な感覺性神経路（上行性神経路）、伝えられた刺激に対する脳の反応を末梢に伝える運動性神経路（下行性神経路）を学んだ後、末梢神経である脳脊髄神経と自律神経の成り立ちを習得する。最後に、中枢に伝える感覺の受容器が存在する皮膚、および視覚器、平衡聴覚器の発生と構造（つくり）および簡単な働きについて学習する。		
到達目標	神経系を構成する神経組織、および神経系の発生を理解したうえで、神経系（中枢神経系、末梢神経系）の構造（つくり）を理解する。さらに、感覚器（皮膚、視覚器、平衡聴覚器）の構造（つくり）を理解する。		
授業形態	講義		「対面授業」あるいは「対面と遠隔の併用授業」

授業計画

回数	項目	講義内容	
1回	解剖学総論	解剖学とは、解剖学の歴史、解剖学用語（人体の区分と名称）	
2回	組織学総論（神経組織）	組織とは、神経細胞（ニューロン）、神経終末、シナプス、神経膠細胞（グリア）	
3回	神経系総論	神経系の発生と区分、脳室、脈絡叢、灰白質、白質、核、神経節、髄膜	
4回	神経系各論（中枢神経系）1	脊髄、菱脳（髄脳）：延髓	
5回	神経系各論（中枢神経系）2	菱脳（後脳）：橋、小脳	
6回	神経系各論（中枢神経系）3	中脳、前脳：間脳	
7回	神経系各論（中枢神経系）4	前脳：終脳	
8回	神経系各論（中枢神経系の伝導路）	神経路（伝導路）の種類、上行性伝導路（体性感覚および深部感覚の伝導路）	
9回	神経系各論（中枢神経系の伝導路）	上行性伝導路（視覚の伝導路、聴覚の伝導路）、下行性伝導路（錐体路系、錐体路系以外の伝導路）	
10回	神経系各論（末梢神経系）1	脳脊髄神経（脳神経）	
11回	神経系各論（末梢神経系）2	脳脊髄神経（脊髄神経）	
12回	神経系各論（末梢神経系）3	自律神経系（交感神経、副交感神経）	
13回	感覚器1	皮膚	
14回	感覚器2	視覚器〔眼球、副眼器（眼瞼、結膜、眼筋）〕	
15回	感覚器3	平衡聴覚器（外耳、中耳、内耳）	

成績評価	全講義終了後に筆記試験を実施して評価する(100%)。 試験の問題形式は国家試験に準拠した多肢選択問題(A-type, X2-type)とする。	受講上のルール・留意点	授業時間数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない
------	---	-------------	----------------------------

課題やレポートに関するフィードバック

書名	著書名	出版社名
教科書	予め配付するプリントを使用して講義を行うので、特に教科書は指定しない。	
参考書		
オフィスアワー	授業前後の休憩時間	

科目	解剖学Ⅱ	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	五十嵐 広明	学年	1年生 前期
実績経験	資格 東邦大学医学部教員34年（その内専任講師27年）、 東京保健医療専門職大学リハビリテーション学部教授（1年） 医学部の教員として長年解剖学教育に携わって来た経験を基に、単に解剖学用語を羅列して覚えてもらう講義ではなく、その用語の深い意味合い、用語と用語の関連性などを、独自に作成した講義資料、自分で作成した顕微鏡写真、多くの蔵書から選んだ画像などを使用して講義を行う。		

授業の位置づけ	人体にある器官は4種類の組織（上皮組織、支持組織、筋組織、神経組織）により構成される。その組織のうち、支持組織に所属する軟骨組織と骨組織について初めて学ぶ。その上で、人体各部の骨と関節の構造（つくり）を習得する。そして筋組織および筋の一般構造と分類を学び、人体各部（頭部、頸部、背部、胸部、腹部、上肢、下肢）に分布する筋群の構成と神経支配、および筋群を構成する筋の作用を理解する。		
到達目標	運動器系を構成する骨格系に所属する人体各部の骨、およびその骨と骨とを連結する関節の構造（つくり）を理解する。その上で、同じ運動器系に所属する筋系の人体各部に分布する筋群の構成、その筋群に所属する個々の筋の付着部位（起始、停止）およびその筋の作用を理解する。		
授業形態	講義		「対面授業」あるいは「対面と遠隔の併用授業」

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	組織学総論1	軟骨組織
2回	組織学総論2	骨組織
3回	骨・関節学各論1	骨・関節の構造と分類
4回	骨・関節学各論2	頭蓋骨とその連結、脊柱とその連結
5回	骨・関節学各論3	胸郭とその連結、上肢骨とその連結
6回	骨・関節学各論4	骨盤とその連結、下肢骨とその連結
7回	筋組織	筋組織（平滑筋、骨格筋、心筋）
8回	筋学総論・各論	筋学総論（骨格筋の構造、基本形態、起始・停止、分類および筋の補助装置等）、筋学各論（頭部の筋）
9回	筋学各論1	頭部の筋、背部の筋
10回	筋学各論2	胸部の筋
11回	筋学各論3	腹部の筋
12回	筋学各論4	上肢の筋1
13回	筋学各論5	上肢の筋2
14回	筋学各論6	下肢の筋1
15回	筋学各論7	下肢の筋2

成績評価	全講義終了後に筆記試験を実施して評価する(100%)。 試験の問題形式は国家試験に準拠した多肢選択問題(A-type, X2-type)とする。	受講上のルール・留意点	授業時間数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない
------	---	-------------	----------------------------

課題やレポートに関するフィードバック

書名	著書名	出版社名
教科書 予め配付するプリントを使用して講義を行うので、特に教科書は指定しない。		
参考書 標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 解剖学 第5版	野村 嶋 編	医学書院
オフィスアワー 授業前後の休憩時間		

科目	解剖学III		単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	五十嵐 広明		学年	1年生 後期
実績経験	資格	東邦大学医学部教員34年（その内専任講師27年）、東京保健医療専門大学リハビリテーション学部教授（1年） 医学部の教員として長年解剖学教育に携わって来た経験を基に、単に解剖学用語を羅列して覚えてもらう講義ではなく、その用語の深い意味合い、用語と用語の関連性などを、独自に作成した講義資料、自分で作成した顕微鏡写真、多くの蔵書から選んだ画像などを使用して講義を行う。		

授業の位置づけ	単に器官の形態と名称を覚えるだけの解剖学に止まらないよう、内臓および循環器系、リンパ様器官の構造（しくみ）に関する少しレベルの高い（医学部の講義の内容に近い）知識を、器官発生学を含んだ講義を通じて習得する。		
到達目標	人体の内臓、すなわち消化器系、呼吸器系、泌尿器系、生殖器系、内分泌系を構成する各器官の構造（しくみ）、およびこれら器官の発生を理解する。そしてさらに、循環器系とリンパ様器官に所属する器官の構造（しくみ）、およびこれらの発生を理解する。		
授業形態	講義	「対面授業」あるいは「対面と遠隔の併用授業」	

授業計画

回数	項目	講義内容	
1回	器官の基本構造 消化器系	中空性器官と実質性器官、消化管（口腔）	
2回	消化器系 1	消化管（咽頭、食道、胃）	
3回	消化器系 2	消化管（小腸、大腸）	
4回	消化器系 3	消化腺（肝臓、胆嚢、脾臓）、消化管と消化腺の発生、腹膜	
5回	呼吸器系 1	鼻腔、喉頭、気管、気管支	
6回	呼吸器系 2	肺、胸膜、縫隔	
7回	泌尿器系 1	腎臓	
8回	泌尿器系 2	腎臓、尿管、膀胱、尿道	
9回	生殖器系 1	泌尿生殖器系の発生、男性生殖器〔精巣、精巣上体、精管、付属線（精囊、前列腺、尿道球腺）、外生殖器〕	
10回	生殖器系 2	女性生殖器（卵巣、卵管、子宮、陰道、外生殖器）	
11回	内分泌系 1	内分泌器の発生、甲状腺、上皮小体	
12回	内分泌系 2	下垂体、視床下部、松果体、副腎、胰島（ランゲルハンス島）	
13回	循環器系 1	I. 血管系：A：総論、血管の構成、全身の循環路、吻合と終動脈、血管壁の構造、 B. 各論 1. 心臓（含む中隔形成）	
14回	循環器系 2	B. 各論 2. 肺循環 3. 体循環(a. 動脈系 b. 静脈系、含む動脈・静脈の発生) II. リンパ管系	
15回	リンパ様器官・組織	リンパ小節、扁桃、リンパ節、脾臓、胸腺	

成績評価	全講義終了後に筆記試験を実施して評価する(100%)。 試験の問題形式は国家試験に準拠した多肢選択問題(A-type, X2-type)とする。	受講上のルール・留意点	授業時間数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない
------	---	-------------	----------------------------

課題やレポートに関するフィードバック

教科書	書名	著書名	出版社名
教科書	予め配付するプリントを使用して講義を行うので、特に教科書は指定しない。		
参考書	日本人体解剖学（下巻）第20版	金子丑之助 原著	南山堂
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

科目	機能解剖学 I	単位・時間数	1 単位・ 30 時間
担当講師	鈴木 章規	学 年	1 年生 前期
実績経験	資格 理学療法士	理学療法士として病院に5年、訪問看護ステーションに7年程度勤務してきました。その中でMovement science、DNS、ボイタ法、MTA等の治療技術を勉強し来ました。講義ではその経験を活かし実技を交えながら筋触察の講義を行います。	

授業の位置づけ	将来、理学療法士として働くうえで、筋骨格を理解する必要性は極めて高いです。2次元でとらえがちな解剖学を、骨指標を基に3次元で捉え、実際に確認していきます。主に体表解剖および筋の起始・停止・走行をマーキングして確認する。 ・講義は2~3人一組で実技を行う。
到達目標	・講義を通して筋肉の起始・停止を理解できるようにする。その中で3次元的に筋肉がどのように走向しているかを学んでいく。
授業形態	講義・実習

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	総論	触察の方法と注意
2回	肩甲骨の講義・演習	肩甲骨の触察とマーキング
3回	小円筋の講義・演習	小円筋の触察とマーキング
4回	棘下筋の講義・演習	棘下筋の触察とマーキング
5回	大円筋の講義・演習	大円筋の触察とマーキング
6回	三角筋の講義・演習	三角筋後部線維の触察とマーキング
7回	上腕三頭筋の講義・演習	上腕三頭筋長頭の触察とマーキング
8回	胸郭の講義・演習	棘突起・肋骨の触察とマーキング
9回	菱形筋の講義・演習	大・小菱形筋の触察とマーキング
10回	肩甲挙筋の講義・演習	肩甲挙筋の触察とマーキング
11回	僧帽筋の講義・演習	僧帽筋上部線維の触察とマーキング
12回		僧帽筋中・下部線維の触察とマーキング
13回	大胸筋の講義・演習	大胸筋鎖骨部の触察とマーキング
14回	上腕二頭筋の講義・演習	上腕二頭筋の触察とマーキング
15回	肩甲骨復習・実技試験	肩甲骨の実技試験

成績評価	筆記試験60%、実技試験40%	受講上のルール・留意点	・講義時間数の1/3以上欠席した者には単位を与えない。 ・講義はジャージ等の動きやすい服装で出席する。 デニム、チノパン等で参加した場合は減点とする。 また、指輪、ピアス、時計等のアクセサリーをつけていた場合も減点とする（結婚指輪は良い）。
------	-----------------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック	
フィードバックは全体に実施する。	

教科書	書名	著書名	出版社名
参考書			
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

科目	機能解剖学Ⅱ	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	鈴木 章規	学年	1年生 後期
実績経験	資格	理学療法士として病院に5年、訪問看護ステーションに7年程度勤務してきました。その中でMovement science、DNS、ボイタ法、MTA等の治療技術を勉強しました。講義ではその経験を活かし実技を交えながら筋触察の講義を行います。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	将来、理学療法士として働くうえで、筋骨格を理解する必要性は極めて高いです。2次元でとらえがちな解剖学を、骨指標を基に3次元で捉え、実際に確認していきます。主に体表解剖および筋の起始・停止・走行をマーキングして確認する。 ・講義は2~3人一組で実技を行う。
到達目標	講義を通して筋肉の起始・停止を理解できるようにする。その中で3次元的に筋肉がどのように走向しているかを学んでいく。
授業形態	講義・実習

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	肩甲骨・骨盤の講義・演習	肩甲骨・骨盤の触察とマーキング
2回	骨盤・大転子の講義・演習	骨盤・大転子の触察とマーキング
3回	広背筋の講義・演習	広背筋の触察とマーキング
4回	腰方形筋の講義・演習	腰方形筋の触察とマーキング
5回	大殿筋の講義・演習	大殿筋の触察とマーキング
6回	中殿筋の講義・演習	中殿筋の触察とマーキング
7回	梨状筋講義・演習	梨状筋の触察とマーキング
8回	半腱様筋の講義・演習	半腱様筋の触察とマーキング
9回	半膜様筋の講義・演習	半膜様筋の触察とマーキング
10回	大腿二頭筋の講義・演習	大腿二頭筋の触察とマーキング
11回	大腿筋膜張筋の講義・演習	大腿筋膜張筋の触察とマーキング
12回	縫工筋の講義・演習	縫工筋の触察とマーキング
13回	大腿直筋の講義・演習	大腿直筋の触察とマーキング
14回	前脛骨筋講義・演習	前脛骨筋の触察とマーキング
15回	骨盤復習・実技試験	骨盤の実技試験

成績評価	筆記試験60%、実技試験40%	受講上のルール・留意点	・講義時間数の1/3以上欠席した者には単位を与えない。 ・講義はジャージ等の動きやすい服装で出席する。 デニム、チノパン等で参加した場合は減点とする。 また、指輪、ピアス、時計等のアクセサリーをつけている場合も減点とする（結婚指輪は良い）。
------	-----------------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック

フィードバックは全体に実施する。

教科書	書名	著書名	出版社名
参考書			
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

科目	生理学Ⅰ		単位・時間数	1単位・ 30時間
担当講師	村上 卓也		学年	1年生 前期
実績経験	資格	理学療法士・認定理学療法士（代謝）・日本糖尿病療養指導士 透析病院に所属する理学療法士として長年治療にかかわってきた経験を活かし、実例を交えながら講義を行う。		

授業の位置づけ	医療従事者となる上で生理学は解剖学と並び必要な知識となります。身体の中の正常な働きを知っていることで、どこの何がどの程度異常になっているかがわかり、そして体内の諸器官は単独で働いているわけではなく相互に密接に関連していることを全体として理解が必要になってきます。これらの内容について出来る限り分かりやすく説明していきます。		
到達目標	生命維持に必要な恒常性維持機能について説明できる。 血液、循環器系、呼吸器系、消化器系、腎臓など各器官系の生理機能、代謝などについて説明できる。		
授業形態	講義 対面授業を基本とするが、社会的状況を鑑み適宜対応する。		

授業計画

回数	項目	講義内容	
1回	生理学とは	恒常性（ホメオスタシス）、細胞生理について	
2回	細胞	細胞膜と物質輸送、細胞膜の興奮について	
3回	体液と血液	体液区分と組成、血液成分について	
4回	血液と免疫	白血球・血小板の役割などについて	
5回	循環 1	心臓の構造、刺激伝導系について	
6回	循環 2	心電図・心音について	
7回	循環 3	血管の構造・機能について	
8回	呼吸 1	呼吸器系の構造、メカニズムについて	
9回	呼吸 2	ガス交換・運搬、呼吸の調節について	
10回	消化器系 1	消化吸収器官の構造・経路・働き、胃・小腸・大腸について	
11回	消化器系 2	肝臓・胆嚢・脾臓の役割について	
12回	栄養と代謝 1	栄養素、代謝、体温について	
13回	栄養と代謝 2	基礎代謝・エネルギー代謝・糖質代謝について	
14回	排泄 1	泌尿器の構造と機能について	
15回	排泄 2	再吸収と分泌、尿生成、腎臓リハビリテーションについて	

成績評価	試験 100%	受講上のルール・留意点	学期末に試験を行います。
------	---------	-------------	--------------

課題やレポートに関するフィードバック	
FBは全体に実施する。	

書名	著書名	出版社名
教科書	生理学テキスト 第8版	大地 陸男 文光堂
参考書	都度紹介します	
オフィスアワー	授業前後の休憩時間	

科目	生理学Ⅱ		単位・時間数	1単位・ 30時間
担当講師	村上 卓也		学年	1年生 後期
実績経験	資格	理学療法士・認定理学療法士(代謝)・日本糖尿病療養指導士		
		透析病院に所属する理学療法士として長年治療にかかわってきた経験を活かし、実例を交えながら講義を行う。		

授業の位置づけ	医療従事者となる上で生理学は解剖学と並び必須な知識となります。身体の中の正常な働きを知っていることで、どこの何がどの程度異常にになっているかがわかり、そして体内の諸器官は単独で働いているわけではなく相互に密接に関連して働いていることを全体として理解が必要になってしまいます。 これらの内容について出来る限り分かりやすく説明していきます。		
到達目標	生命維持に必要な恒常性維持機能について説明できる。 内分泌系、生殖・遺伝、筋系、神経系、感覚器系など各器官系の生理機能について説明できる。		
授業形態	講義 対面授業を基本とするが、社会的状況を鑑み適宜対応する。		

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	内分泌系 1	内分泌腺、下垂体について
2回	内分泌系 2	甲状腺、副甲状腺、副腎について
3回	内分泌系 3	臍臓、性腺について
4回	生殖・遺伝	生殖、遺伝について
5回	筋系 1	骨格筋の構造、筋線維について
6回	筋系 2	筋収縮について
7回	神経系 1	神経、シナプスについて
8回	神経系 2	末梢神経について
9回	神経系 3	自律神経について
10回	神経系 4	中枢神経系、大脳について
11回	神経系 5	脳波、睡眠、学習、記憶、間脳について
12回	神経系 6	脳幹、小脳、脊髄、脊髄反射について
13回	神経系 7	下行性伝導路、上行性伝導路について
14回	感覚器系 1	感覚の概要、皮膚感覚、深部感覚、痛覚、内臓感覚について
15回	感覚器系 2	嗅覚、視覚、聴覚、平衡感覚、味覚について

成績評価	試験 100%	受講上のルール・留意点	学期末に試験を行います。
------	---------	-------------	--------------

課題やレポートに関するフィードバック	
FBIは全体に実施する。	

書名	著書名	出版社名
教科書	生理学テキスト 第8版	大地 陸男
参考書	都度紹介します	
オフィスアワー	授業前後の休憩時間	

科目	生理学Ⅲ	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	小平 健太郎	学年	1年生 後期
実績経験	資格 NSCA-CSCS, NSCA-CPT, 体育学修士	運動と健康に関する現実的課題に対して、これまでトレーニングコーチとして運動選手から一般の方への運動指導経験を講義に反映して展開する。保健医療（理学療法・作業療法、看護、臨床検査、鍼灸理療、柔道整復等）部門で生理学授業を担当している教員が医療従事者に必要な生体機能の調節機構について日常生活からの視点を例示しながら講義を実施する。	

授業の位置づけ	<p>少子高齢化、健康長寿は今後ますます重要になる課題である。運動が身体にもたらす好影響は挙げられているが、適切なものでなくては逆効果にもなってしまうリスクも持っている。運動時の反応や調節作用を理解することで適切に運動を活用することができる。生理学Ⅰ、Ⅱの内容をベースに運動時にみられる調節反応を説明し、演習や動画教材も活用して解説する。</p> <p>講義ならびに、演習・グループワークを併用して実施する。</p>		
到達目標	<p>①筋収縮に伴うエネルギー代謝を説明できる、②運動に伴う呼吸循環系の適応を説明できる ③筋力発揮に影響を与える要因について説明できる、④運動刺激に応じた内分泌調節を説明できる ⑤環境が運動に与える影響を説明できる、⑥運動と発育発達、加齢老化について説明できる ⑦目的に応じた運動処方の概要を説明できる</p>		
授業形態	講義・演習		対面と遠隔の併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	運動の必要性、体力	運動に求められているもの、体力要素の分類
2回	エネルギー供給系①	筋収縮とエネルギー供給経路
3回	エネルギー供給系②	エネルギー基質の回復
4回	運動と呼吸循環系	運動に伴う呼吸循環系の調節・適応
5回	運動処方-1	呼吸循環、エネルギー代謝からの運動処方
6回	運動と筋力①	筋力発揮に影響を与える要因
7回	運動と筋力②	運動単位、反射、脳の運動調節
8回	運動と内分泌①	運動刺激と内分泌応答
9回	運動と内分泌②	内分泌と糖代謝
10回	運動処方-2	筋力トレーニングの運動処方
11回	運動と環境	高地、水中、暑熱・寒冷環境への応答
12回	運動と発育発達	発育・発達に伴う運動機能の変化
13回	運動と加齢老化	加齢・老化に伴う運動機能の変化
14回	運動処方-3	目的、対象に合わせた運動処方の立案、評価
15回	運動生理学総論	これまでの講義を踏まえての総合考察

成績評価	試験：85%、講義内小テスト15%の合計100%で評価する。 授業時間数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない。	受講上のルール・留意点	試験、小テストともに記述式・選択式の併用で基本事項を踏まえたものを出題する。小テストは5回実施する。
------	---	-------------	--

課題やレポートに関するフィードバック	
FBは全体に対して実施する	

書名	著書名	出版社名
教科書 入門運動生理学第4版	勝田茂 編著	杏林書院
参考書		
オフィスアワー 授業前後の休憩時間		

科目	生理学実習		単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	飯村 佳織		学年	1年生 後期
実績経験	資格	生理学の研究者（専門家）としての経験と、教育機関における非常勤講師としての経験を活かし、ヒトに備わった生理機能について理解が深まるよう実習を行います。		
	はり師、きゅう師			

授業の位置づけ	生理学実習はグループ学習が基本となります。ヒトの生理機能の基本となる、血圧や心拍、心電図、皮膚感覚、筋電図について、安静時の状態や、どのような状況（刺激）によりどのような変動が示すのかを実際に自身の体で測定してもらい、さらにグループ内で比較することで個体差について観察します。測定機器の操作を習得することや生理機能の変化を体験すること、さらに実施した内容をレポートとして文章と図でまとめてことで、生理学で学んだ内容の理解をより深めることができます。		
到達目標	人体の生理機能についての理解を深める		
授業形態	対面授業		

授業計画

回数	項目	講義内容	
1回	実習の一般的解説	生理学実習における注意事項、授業の進め方の解説	
2回	実習①～③の解説	実習内容の予習	
3回 4回	①血圧と心拍数-1	血圧と心拍を測定し、安静時および体位変換の影響を理解する	
5回 6回	②血圧と心拍数-2	血圧と心拍を測定し、運動負荷と寒冷負荷の影響を理解する	
7回 8回	③心電図	心電図を記録し、深呼吸や精神負荷の影響を理解する	
9回	実習内容のまとめ又は発表会	実習内容をまとめる、または、グループで実習①～③についてプレゼンテーションを実施する（社会状況により変更有）	
10回	実習④、⑤の解説	実習内容の予習	
11回 12回	④皮膚感覚	各皮膚部位による感覚点の測定を実施し、皮膚部位による感覚点の分布の違いや、冷却が皮膚感覚に及ぼす影響を理解する	
13回 14回	⑤随意運動と表面筋電図	筋電図を記録し、安静時や運動時の屈筋と伸筋の働きを理解する	
15回	生理学の講義又は発表会	生理学の最新の知見について講義する。または、グループで実習④⑤についてプレゼンテーションを実施する（社会状況により変更有）	

成績評価	各実習レポート 90% ・発表会や ・その他の提出物 10%	受講上のルール・留意点	毎実習ごとに各自レポートを作成し、次週の授業開始時に提出していただきます。また、授業時間数の3分の1以上欠席した者には単位を与えることはできません。
------	--------------------------------------	-------------	--

課題やレポートに関するフィードバック

FBは講義内で全体に実施します。

教科書	書名	著書名	出版社名
	生理学実習NAVI 第2版	大橋敦子	医歯薬出版
参考書			
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

科 目	運動学 I		単位・時間数	1単位・ 30時間
担当講師	鈴木 雅男		学 年	1年生 前期
実績経験	資格	実務経験 35年 理学療法士として、一般病院、総合病院、教育機関に常勤として勤務。非常勤として市・区の保健センター、介護老人保健施設、訪問リハビリテーションにて勤務歴があり、急性期から維持期にかけての経験から授業を行う。		
	理学療法士			

授業の位置づけ	理学療法士には、患者の身体機能や運動能力を評価しアプローチしていくことが求められる。したがって日常生活での人の基本的な運動を把握し、患者の動作上の問題点を分析できることが必要とされる。その分析ためには、基本的な運動の要素と身体運動の基となる関節運動や、筋肉の作用を理解しなければならない。この授業では、関節運動の特徴と運動を作り出している筋肉の作用を中心に学習し、動作分析の基礎を身につける事を目的とする。 以下の内容を理解する。 1. 力学的な基礎 2. 上肢の関節運動と筋の作用 3. 体幹の関節運動と筋の作用
到達目標	1. 身体運動の面と軸が言うことができる。 2. 運動の法則とこの特徴を説明できる。 3. 上肢および体幹の関節の構造と種類、運動とその特徴を言うことができる。 4. 上肢および体幹の運動にたずる筋の作用を言うことができる。 5. 上肢および体幹の個々の筋の作用を言うことができる。 6. 手の伸展機構を説明することができる。
授業形態	講義・演習

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	生体力学の基礎	身体運動の面と軸、運動法則、身体とてこ
2回	関節運動と筋活動の基礎	関節の種類と運動軸、筋収縮の種類
3回	上肢帯と肩関節の運動	上肢帯と肩関節の構造と種類、上肢帯と肩関節の運動
4回	上肢帯と肩関節の運動	上肢帯の筋と作用
5回	上肢帯と肩関節の運動	肩関節の筋と作用
6回	上肢帯と肩関節の運動	肩関節の筋と作用
7回	肘関節と前腕の運動	関節の構造と種類、肘関節と前腕の運動
8回	肘関節と前腕の運動	肘関節・前腕の筋と作用
9回	手関節と手の運動	手関節および手の関節の構造と種類、手関節と手の運動
10回	手関節と手の運動	腱鞘、指の運動と指背腱膜、手関節の筋と作用
11回	手関節と手の運動	手の筋と作用
12回	手関節と手の運動	手のアーチ、手の把持動作、手の変形
13回	頸椎の運動	椎骨の構造、椎骨の運動、椎間円盤、頸椎の運動と筋の作用
14回	胸部の運動	胸部の構造、呼吸運動と筋の作用
15回	腰椎の運動	腰椎の構造、腰椎の運動と筋の作用

成績評価	筆記試験90% 小テスト10%	受講上のルール・留意点	授業中は私語を避んで授業に集中する。 グループワーク課題は積極的に行う。
------	--------------------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは全体に行う。

書名	著書名	出版社名
教科書	基礎運動学	中村隆一、斎藤 宏 医歯薬出版株式会社
参考書	カバンディ 関節の生理学	A. LALPANDJI 医歯薬出版株式会社
オフィスアワー	担当授業前後、教員室にて	

科 目	運動学Ⅱ		単位・時間数	1単位・ 30時間
担当講師	鈴木 雅男		学 年	1年生 前期
実績経験	資格	実務経験 35年 理学療法士として、一般病院、総合病院、教育機関に常勤として勤務。非常勤として市・区の保健センター、介護老人保健施設、訪問リハビリテーションにて勤務歴があり、急性期から維持期にかけての経験から授業を行う。		
	理学療法士			

授業の位置づけ	理学療法士には、患者の身体機能や運動能力を評価しアプローチしていくことが求められる。したがって日常生活での人の基本的な運動を把握し、患者の動作上の問題点を分析できることが必要とされる。その分析ためには、基本的な運動の要素と身体運動の基となる関節運動や、筋肉の作用を理解しなければならない。この授業では、関節運動の特徴と運動を作り出している筋肉の作用を中心に学習し、動作分析の基礎を身につける事を目的とする。 以下の内容を理解する。 1. 下肢の関節運動と筋 2. 姿勢 3. 歩行
到達目標	1. 上肢および体幹の関節の構造と種類、運動とその特徴を言うことができる。 2. 上肢および体幹の運動にたずる筋の作用が言うことができる。 3. 上肢および体幹の個々の筋の作用が言うことができる。 4. 基本的な姿勢とその名称が言うことができる。 5. 身体重心と重心線、筋活動が説明できる。 6. 姿勢制御と反射・反応、戦略について説明できる。 7. 歩行周期について用語を用いて説明できる。 8. 歩行メカニズムを理解し、身体運動について説明できる。 9. 歩行時の筋活動やロッカーファンクションについて説明できる。
授業形態	講義・演習

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	股関節の運動	骨盤と股関節の構造と種類、韌帯と作用
2回	股関節の運動	股関節の運動と筋の作用
3回	股関節の運動	股関節の安定性、片脚立位時の股関節の力学的特性
4回	膝関節の運動	膝関節の構想と種類、韌帯と作用、半月の作用、膝蓋骨の作用
5回	膝関節の運動	膝関節運動と筋の作用
6回	足関節と足の運動	足関節および足の関節の構造と種類、足関節と足の運動
7回	足関節と足の運動	足関節の筋と作用
8回	足関節と足の運動	足のアーチと機能、足の変形
9回	姿勢	姿勢の種類、名称、姿勢の安定条件
10回	姿勢	身体重心、重心線、立位時の筋活動
11回	姿勢	姿勢制御、反射・反応、戦略
12回	歩行	歩行周期、従来の用語・新しい用語
13回	歩行	歩行のメカニズム、身体の動き
14回	歩行	歩行時の筋活動、ロッカーファンクション
15回	まとめ	復習

成績評価	筆記試験90% 小テスト10%	受講上のルール・留意点	授業中は私語を避けて授業に集中する。 グループワーク課題は積極的に行う。
------	--------------------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは全体に行う。

教科書	書名 基礎運動学 観察による歩行分析	著書名 中村隆一、斎藤 宏 Kristen Gotz-Neumann	出版社名 医歯薬出版株式会社
参考書	カパンディ 関節の生理学	A. LALPANDJI	医歯薬出版株式会社
オフィスアワー	質問や在室状況はメールで確認 m-suzuki@nichireha.ac.jp		

科目	人間発達学	単位・時間数	1単位・ 30時間
担当講師	大山 敬子	学年	1年生 後期
実績経験	資格	平成13年作業療法士免許取得後、0歳～50歳代の発達障害児者にかかり、特別支援学校にて勤務、人間発達学の重要性を講義に取り入れていきたい。	
	作業療法士		

授業の位置づけ	胎児期から高齢期までの人間の発達について学びます。各時期において、身体的機能・運動的機能・認知的機能・情緒的・社会機能がどのような相互関係で発達するのかを学習します。	
到達目標	各時期についてまとめたプリントを配布し、プリントに沿って授業を進めて行きます。	
授業形態	講義	対面授業、場合によっては遠隔授業（ZOOM）

授業計画

回数	項目		
1回	オリエンテーション 人間発達学とは・胎児期	人間発達学で何を学ぶ？発達概念の歴史変遷。	
2回	胎児期：反射と反応	人間の発達は胎児期から始まっている 生きるための反射と反応	
3回	新生児期	『出生から4週間目』の新生児の発達	
4回	乳児期前半	『出生後4～8週』『出生後2～5ヶ月』の2つの時期。	
5回	乳児期後半	『出生後5～8ヶ月』『出生後8～12ヶ月』の2つの時期。	
6回	乳児期の摂食『離乳食』	哺乳から離乳食完了までの口腔機能の発達	
7回	NATIONAL GEOGRAPHIC 「赤ちゃんの不思議etc」	1歳までの発達の振り返りとビデオでの学習	
8回	幼児期前半（1歳台）	『12ヶ月～18ヶ月』『18ヶ月～24ヶ月』の2つの時期。	
9回	幼児期前半（2歳台）	『24ヶ月～30ヶ月』『30ヶ月～36ヶ月』の2つの時期。	
10回	幼児期後期（年少・年中）	『3歳代（幼少）』『4歳代（年中）』の2つの時期。	
11回	幼児期後期（就学期前の1年）	『5歳代（年長・就学前）』	
12回	学童期	小学生の発達	
13回	青年期	『前期：中学生・高校生』『後期：18～22歳』の1つの時期。	
14回	成人期	『前期：22～35歳』『中期：35～50歳』『後期：50～65歳』	
15回	高齢期	『65歳～』人間は死ぬまで発達する？	

成績評価	筆記試験100%	受講上のルール・留意点	授業時間数の3分の1を超えて欠席した者には単位を与えない
------	----------	-------------	------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック	

教科書	書名 コメディカルのための専門基礎分野テキスト 人間発達学 第3版	著書名 福田 恵美子 編集	出版社名 中外医学社
参考書	標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 人間発達学 障害児者の摂食・嚥下・呼吸リハビリテーション		医学書院 医歯薬出版
オフィスアワー			

科目	リハビリテーション医学概論Ⅰ	単位・時間数	2単位・30時間
担当講師	草野 修輔、工藤 征四郎、佐々木 和裕	学年	1年、前期

教育目標	リハビリテーション医学概論に関する基本的知識を習得する。
教育内容	リハビリテーション医学基礎知識とリハビリテーション発展の歴史・現状・課題並びにリハビリテーション主要分野の概要等について知識の修得。更には、リハビリテーションと深い関連を有する福祉・医療・保健等について知識の修得。

講義内容

回数	項目	講義内容
1回	①リハビリテーションという用語の意味の変遷	全米リハビリテーション協議会の定義 中世及び近世ヨーロッパと現代のリハビリテーションという用語の意味の違い
	②リハビリテーションの定義に関すること及びリハビリテーションの主要分野（5分野）の各定義	世界保健機構（WHO）による定義
		国連・障害者世界行動計画による定義 我が国におけるリハビリテーション理念
2回	世界のリハビリテーションの歴史的変遷	リハビリテーションの国際的発展過程
3回		我が国におけるリハビリテーションの発展
		リハビリテーションにかかる専門職の養成
4回～6回	現代におけるリハビリテーションニーズ	国連・障害者世界行動計画におけるリハビリテーション 障害者運動の影響 国際障害者年 障害者プランの推進と障害者基本法 社会福祉基礎構造改革
		リハビリテーションニーズ リハビリテーションの基本理念
7回		国際障害分類及び国際生活機能分類
インフォームドコンセント・EBM（根拠に基づく医療） 医療チーム・クリニカルパス・医療安全		
個人情報保護法 ユニバーサルデザイン 医学的リハビリを巡る過去・現在、医学的リハビリの課程と現実		
10回～11回	リハビリテーションの主要分野とそのサービス体系	医学的リハビリテーション 職業的リハビリテーション 社会的リハビリテーション 教育的リハビリテーション
12回	①理学療法士及び作業療法士法の概要 ②理学療法士及び作業療法士法施行の概要	理学療法士や作業療法士の名簿・登録と秘密保持義務、理学療法士・作業療法士の名称の使用制限等定義免許及び免許欠格事由 理学療法士・作業療法士の免許申請・名簿の登録、名簿の訂正、登録の削除、免許返納等
13回	各種障害	運動障害、感覺障害、高次脳機能障害、その他
14回～15回	リハビリテーションに関する課程と学習	学生にリハビリの課題を与え学習結果を検証する。

定期試験は別日程にて実施

評価方法	筆記試験による	
	オフィスアワー	授業前後の休憩時間
教科書	リハビリテーション概論（手作り最新版）・・・授業中に配布	

科目	病態運動学	単位・時間数	1単位・ 15時間
担当講師	畠山 敦	学年	1年生 後期
実績経験	資格	1985理学療法士免許習得37年目となる。責任者として急性期病院で施設認可を2か所取得(他OTの認可も立ち会う)。主として、急性期の脳卒中患者を中心整形外科等、地域の中核病院を12年ほど経験してきた。平成9年、疼痛治療のため鍼灸の夜学を卒業、同年より日本リハビリテーション専門学校勤務となる。	
	理学療法士・鍼師・灸師		

授業の位置づけ	分析は設計図を明らかにすることであり、異常の成り立ちは即ち治療目標や手立てを導き出すものである。仮設立証作業としての大切なツールであることから、動作の前提となる形態異常を姿勢分析として確認しながら、疾患による限定される動作を理解する。		
到達目標	重心の偏り、又は疾病⇒筋緊張の異常⇒異常姿勢⇒運動制限⇒限定される動作⇒制約されれる日常生活⇒社会参加への困難性を考える事が出来る。		
授業形態	講義・実習		対面授業

授業計画

回数	項目	講義内容	
1回	正常動作に必要な基礎	動作観察と分析	
2回	姿勢分析	分節の歪みと筋、病態が示す異常姿勢	
3回	異常歩行	下肢荷重関節の障害と動作	
4回		神経筋障害の歩行	
5回	動作分析	多関節障害の動作	
6回		パーキンソン氏病と片麻痺	
7回		脳性小児まひの動作	
8回		正常人の動作	

成績評価	筆記試験80%、提出物20%欠格要件（授業時間1/3以上の結石者は単位を与えない）	受講上のルール・留意点	他者に対する礼儀と配慮、必要であれば補講又は実技練習を設ける
------	---	-------------	--------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック
メールでの添付にて提出、添削によるフィードバック

	書名	著書名	出版社名
教科書			
参考書	臨床動作分析	奈良歟	医学書院
オフィスアワー	担当授業の前後		

科目	運動療法学 I	単位・時間数	1単位・ 30時間
担当講師	畠山 敦	学年	1年生 後期
実績経験	資格	1985理学療法士免許習得37年目となる。責任者として急性期病院で施設認可を2か所取得(他OTの認可も立ち会う)。主として、急性期の脳卒中・失調症患者を中心と整形外科等、地域の中核病院を12年ほど経験してきた。平成9年、疼痛治療のため鍼灸の夜学を卒業、同年から教育機関歴25年目である。	
	理学療法士・鍼師・灸師		

授業の位置づけ	運動療法は理学療法の根幹となる部分である。技術の派生は多岐にわたる。その根本をなす運動療法の目的を理解するためには、他科目で学習した解剖・生理・運動学などを統合していく必要があ、再確認の場ともなる。また、実技を実際行うことで、相手に対する行動として、里9額療法士のたしなみや配慮の必要性を感じて欲しい。		
到達目標	各種運動療法の目的や効果の学習と運動療法の実践		
授業形態	講義・演習		対面授業

授業計画

回数	項目	講義内容	
1回	運動療法の総論	運動療法とは、種類と効果 (学習前に: 他者との関係を認識する。)	
2回	運動学の基礎	重心と姿勢、梃子	
3回	関節・筋の構造と基礎	拘縮と強直 筋の収縮様式と筋張力	
4回	運動感覚(固有受容器)	運動感覚(深部) と立ち直り反応	
5回	運動と循環(リンパ)		
6回	関節可動域訓練	目的・適応・禁忌・注意点	
7回	関節可動域訓練	実技練習	
8回	関節可動域訓練	実技練習	
9回	ストレッチ	目的・適応・禁忌・注意点	
10回	ストレッチ	実技練習	
11回	ストレッチ	実技練習	
12回	筋力増強訓練	目的・適応・禁忌・注意点	
13回	筋力増強訓練	実技練習	
14回	筋力増強訓練	実技練習	
15回	総復習		

成績評価	筆記試験80%、提出物20%欠格 要件 (授業時間1/3以上の結石者には単位を与えない)	受講上のルール・留意点	他者に対する礼儀と配慮、必要であれば補講又は実技練習を設ける
------	---	-------------	--------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック
メールでの添付にて提出、添削によるフィードバック

書名	著書名	出版社名
教科書 運動療法学 障害別アプローチの理論と実際 第2版	市橋則明	文光堂
参考書		
オフィスアワー 担当授業の前後		

科 目	総合演習Ⅰ	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	夜間部教員	学 年	1年、後期

教育目標	1年生における専門基礎分野の授業科目で学ぶ医学的・理学的な基礎知識に基づいて、担当教員の指導のもとに種々の症例ケースを通して上級生（2年生または3年生）の参加を得ながら医学的・理学療法的な基礎知識の習熟教育訓練を行う。
教育内容	グループワークを通して、問題解決型思考を学んでいく。

講義内容

回数	項 目	講 義 内 容
1回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
2回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
3回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
4回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
5回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
6回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
7回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
8回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
9回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
10回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
11回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
12回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
13回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
14回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
15回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業

定期試験は別日程にて実施

評価方法	出席、試験、授業態度
------	------------

教科書 なし

科 目	検査測定法 I		単位・時間数	1単位・ 30時間			
担当講師	塩澤 和人、鍋城 武志		学 年	1年生 後期			
実績経験	資格	塩澤：実務経験 15年 理学療法士として、回復期病棟・急性期病院・デイサービス・障害者福祉施設・介護予防事業・教育機関にて積極的に治療を行ってきた実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う。 鍋城：実務経験 18年 理学療法士として、急性期病院、教育機関に常勤として勤務。実務経験を活かし実例を交えながら講義を行う。					
授業の位置づけ	<p>本授業は理学療法評価の総論および各論として、一般的評価事項、バイタルサイン、形態測定、関節可動域測定、知覚検査について理解し、測定法および評価法を身につけることを目標とする。評価は患者のもつ症状や障害を把握、分析し治療方針を立て、その治療結果を確認する過程であり、まさに理学療法の設計図といわれるものである。</p> <p>1. 理学療法評価の意義と目的を説明できる。 2. 各検査法を実施し、その結果を解釈できる。</p> <p>授業方法は「講義」、「実技」で構成される。</p>						
到達目標	<p>①評価の意義・目的を説明できる。 ②医療面接、血圧測定、形態測定、関節可動域測定、知覚検査ができ、結果を解釈できる。 ③各種検査の異常を説明できる。</p>						
授業形態	講義・演習		対面授業				

授業計画

回数	項目	講義内容	
1回	総論	評価の意義・目的、ICIDH、ICF	
2回	一般的評価事項	医療情報のとり方、医療面接	
3回	バイタルサイン	脈拍・血圧測定	
4回	形態測定①	四肢長および肢節長の測定	
5回	形態測定②	周径の測定	
6回	知覚検査①	知覚とは、表在感覺	
7回	知覚検査②	深部感覚、複合間隔	
8回	関節可動域測定①	基本的肢位・運動方向、表示法、肩甲帯、肩関節（屈伸）	
9回	関節可動域測定②	肩関節（内外転・内外旋）	
10回	関節可動域測定③	肩関節（水平屈曲伸展）、肘関節（屈伸）	
11回	関節可動域測定④	前腕、手関節、股関節（屈伸、内外転）	
12回	関節可動域測定⑤	股関節（内外旋）、膝関節（屈伸）	
13回	関節可動域測定⑥	足関節（底背屈）、足部（外がえし内がえし、内外転）	
14回	関節可動域測定⑦	頸部、体幹	
15回	臨床応用	拘縮と強直、可動域制限の因子	

成績評価	定期試験： 筆記試験70%、 小テスト10% 実技試験20%	受講上のルール・留意点	実技では動きやすい服装（基本は短パン、Tシャツ）の準備をすること。
------	---	-------------	-----------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック			
実技に関するフィードバックは実技練習中、練習の後、個別または全体に対して適宜実施する。			

書名	著書名	出版社名
教科書	理学療法評価学 改訂第6版	松澤 正、江口勝彦
参考書	PT・OTのための測定評価 ROM測定 第2版	福田 修 監修
オフィスアワー	担当授業の前後	

科目	検査測定法Ⅱ	単位・時間数	1単位・ 30時間
担当講師	塩澤 和人	学年	1年生 後期
実績経験	資格	実務経験 15年 理学療法士として、回復期病院、急性期病院、デイサービス、障害者福祉施設、介護予防事業、教育機関にて治療を行ってきた実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	筋力とは随意的な筋収縮によって起こる筋の張力であり、身体の運動に不可欠なものである。本授業では筋力について理解し、徒手筋力検査 (manual muscle test;MMT) について測定法および評価法を身につけることを目標とする。 講義と実技をとおして徒手筋力検査について解説する。 筋の起始・停止、運動および触診について理解しておく。
到達目標	①徒手筋力検査法により測定し、筋力を評価できる。 ②代償運動（ごまかし運動）を説明できる。
授業形態	講義・演習

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	概論、下肢①	筋力とは、MMTの意義、判定基準、股関節屈曲・外転・外旋・伸展
2回	下肢②	股関節外転、股関節屈曲位からの外転、股関節内転
3回	下肢③	股関節内外旋、膝関節屈曲
4回	下肢④	膝関節伸展、足関節底屈、足関節背屈ならびに内がえし
5回	下肢⑤	足の内がえし、足の底屈を伴う外がえし、母趾と足趾関連
6回	下肢⑥、顔面	母趾と足趾関連、顔面（脳神経支配筋）
7回	頭部、頸部（頸筋）	頭部伸展、頸部伸展、頭部屈曲、頸部屈曲、頸部回旋
8回	体幹（体幹筋）	体幹伸展、骨盤挙上、体幹屈曲、体幹回旋
9回	上肢①	肩甲骨外転と上方回旋、肩甲骨挙上、肩甲骨内転
10回	上肢②	肩甲骨下制と内転、肩甲骨内転と下方回旋、広背筋
11回	上肢③	肩屈曲、肩伸展、肩外転
12回	上肢④	肩水平外転、肩水平内転、肩外旋
13回	上肢⑤	肩内旋、肘屈曲、肘伸展
14回	上肢⑥	前腕回内外、手関節屈伸
15回	上肢⑦、まとめ	指、母指関連、まとめ

成績評価	定期試験： 筆記試験 70 % 小テスト 10 % 実技試験 20 %	受講上のルール・留意点	実技では動きやすい服装（基本は短パン、Tシャツ）の準備をすること。
------	--	-------------	-----------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック

実技に関するフィードバックは実技練習中、練習の後、個別または全体に対して適宜実施する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	新・徒手筋力検査法 原著第10版	Dale Avers他著、津山直一他訳	協同医書
参考書			
オフィスアワー	担当授業の前後		

科目	理学療法概論	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	阿部 靖・他	学年	1年生 前期
実績経験	資格 理学療法士	実務経験 総合病院・整形外科クリニック・老健・訪問リハ・ デイケア・教育機関	経験年数 21年

授業の位置づけ	この授業では理学療法業務、理学療法士の役割を理解し、説明できるようになることを目的とする。医療・福祉分野における理学療法業務を実施するために、様々な業務の特徴を理解すること、プロフェッショナルの視点を持つための基礎を築くことが求められる。		
到達目標	理学療法業務、理学療法士の役割について理解し、説明することができる。 理学療法士の倫理観、行動規範について理解し、説明することができる。		
授業形態	講義・演習・実習		併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容	
1回	総論	理学療法の歴史について学ぶ	
2回	総論	理学療法士の役割について学ぶ	
3回	情意について	理学療法に求められる倫理観、専門職の意義について学ぶ	
4回	情意について	理学療法に求められる倫理観、専門職の意義について学ぶ	
5回	知識について	理学療法に求められる知識について学ぶ	
6回	知識について	理学療法に求められる知識について学ぶ	
7回	精神・運動について	理学療法に求められる技能について学ぶ	
8回	精神・運動について	理学療法に求められる技能について学ぶ	
9回	社会的役割	理学療法士の社会的役割、協会の活動について学ぶ	
10回	校外実習	臨床現場で必要な能力を学ぶ	
11回	校外実習	臨床現場で必要な能力を学ぶ	
12回	校外実習	臨床現場で必要な能力を学ぶ	
13回	校外実習	臨床現場で必要な能力を学ぶ	
14回	校外実習	臨床現場で必要な能力を学ぶ	
15回	校外実習	臨床現場で必要な能力を学ぶ	

成績評価	レポート課題 100%	受講上のルール・留意点	特になし。
------	-------------	-------------	-------

課題やレポートに関するフィードバック

個別及び全体にフィードバックする。

教科書	書名	著書名	出版社名
参考書			
オフィスアワー	メールでの連絡は随時 y-abee@nichireha.ac.jp		

科 目	臨床見学実習Ⅰ	単位・時間数	1 単位・ 4 5 時間
担当講師	理学療法学科教員	学 年	1 年、通年

教育目標	<ul style="list-style-type: none"> ・臨床現場の理学療法士の役割、具体的な仕事内容を説明できる。 ・医療・福祉現場で働く専門職としての心構えを理解し、説明できる。 ・この見学から何を得て、今後何に取り組むべきかを明確にし、説明できる。
教育内容	<ol style="list-style-type: none"> 1) 病院・施設の理学療法士から、各施設での理学療法士の役割を学ぶ。 2) 理学療法士の持つ責任と心構えについて学ぶ。 3) 理学療法士が患者・利用者に対し、どのような接し方をしているか学ぶ。 4) 患者とのコミュニケーションを通して、理学療法士に求められるものを学ぶ。

評価方法	臨床実習指導者の評価および担当教員の評価、レポート
------	---------------------------

教科書
参考書

理学療法学科 夜間部

科 目	自然科学	単位・時間数	2 単位・30 時間
担当講師	野村 崇	学 年	2 年、後期
実務経験		経験年数	

教育目標	1. 専門科目を理解するために必要な物理学の知識の習得する。 2. 現実の場面で科学的な物の見方ができるようになること。
教育内容	力学を中心に行う。

講義内容

回数	項 目	講 義 内 容
1回	物理量と単位	物理学で扱う量とその特徴、単位
2回	力 (1)	力の表示法、いろいろな力、力の合成法とその応用
3回	力 (2)	力の分解法とその応用、力の例（牽引、摩擦）
4回	力のモーメント (1)	力のモーメントとは、応用 (1)
5回	力のモーメント (2)	力のモーメントの応用 (2) （重心の求め方）
6回	安定・不安定	物体が倒れる条件、安定状態の例、人体の重心
7回	てこ	てこの種類と特徴
8回	生体内のてこ (1)	生体内に存在するてこ1（頭部、肘関節部）
9回	生体内のてこ (2)	生体内に存在するてこ2（肩関節部、膝関節部、股関節部、足関節部、様々な姿勢でのてこ）
10回	生体内のてこ (3)	背中の筋肉や腰にかかる力
11回	筋肉、滑車、輪軸	筋の収縮様式、滑車の種類と特徴、輪軸の特徴
12回	物体の運動 (1)	位置と変位、速度、加速度
13回	物体の運動 (2)	運動の三法則、仕事、仕事率(並進運動)
14回	物体の運動 (3)	仕事率(回転運動)、力学的エネルギー
15回	物体の運動 (4)	運動量と撃力

定期試験は別日程にて実施

評価方法	筆記試験、出席状況を参考にする。
------	------------------

教科書 なし

参考書 1) PT・OTゼロからの物理学 望月久、棚橋信雄 羊土社

2) [PT] [OT] [PO] 身体運動の理解につなげる物理学 江原義弘、山本澄子、中川昭夫 南江堂

科目	運動学実習	単位・時間数	1単位・ 45時間
担当講師	有本 邦洋	学年	2年生 後期
実績経験	資格 理学療法士	訪問リハビリ、通所リハビリ勤務経験を活かし、その経験を授業の取り入れていく	

授業の位置づけ	ヒトの特徴を脳機能（情動含む）・身体機能面から分析できる力を養う。 なかでも基本的動作能力について分析できる力を養う。 ICFの分類に基づき動作を考察できる思考力を養う。	
到達目標	講義のもと学生間の模擬実習を通じて患者の動作を理解していく	
授業形態	講義及び実技	対面授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回		
2回	臨床動作分析総論	イントロダクション
3回		
4回	運動学習	運動制御理論と運動学習理論
5回	正常動作	基本動作の概要
6回		動作分析の特徴
7回	動作分析の進め方と展開	問題解決と意思決定
8回		推論過程
9回		臥位
10回		寝返り動作
11回		起き上り動作
12回	動作分析の実際（目視による評価）	座位
13回		立上り動作
14回		立位
15回		歩行
16回	動作分析実習（動作メカニズムの評価）	寝返り動作
17回		起き上り動作
18回		立ち上り動作
19回		
20回		
21回		
22回		
23回		歩行

成績評価	レポート他	受講上のルール・留意点	授業時間数の3分の1を超えて欠席した者には単位を与えない
------	-------	-------------	------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック

--

教科書	書名 動作分析 臨床活用講座-バイオメカニクスに基づく臨床推論の実践	著書名 石井真一郎	出版社名 メジカルビュー
参考書	アナトミー・トレイン [DVD付] 第3版	トマス・W.マイヤー	医学書院
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

科目	解剖学IV	単位・時間数	1単位・15時間
担当講師	塩澤 和人、外部講師	学年	2年生及び3年生
実績経験	資格	塩澤 和人 実務経験 15年 理学療法士として、回復期病棟、急性期病院、デイサービス、障害者福祉施設、介護予防事業、教育機関に携わった実務経験を活かし、実習を支援していく。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	<p>本授業は大学医学部、歯学部のご協力のもと、「骨格系・筋肉系・神経系」を中心とした人体の基本構造を学び、三次元的に理解し、医の倫理、生命の尊厳を自ら学びとることを目標としている。</p> <p>今まで学習した解剖学、生理学について、復習しておくこと。</p> <p>大学施設にて「講義」「実習」を行う。</p>		
到達目標	<p>1. 人体の構造と機能について、基本構造を説明することができる。</p> <p>2. 医療従事者を目指す者として、医の倫理を理解し、生命を尊厳を尊厳することができる。</p>		
授業形態	講義・演習・実習		対面授業

授業計画

回数	項目	講義内容	
1回	解剖見学実習①	「骨格系・筋肉系」の構造について	
2回	解剖見学実習②	「神経系」の構造について	
3回	医の倫理①	医の倫理について	
4回	医の倫理②	生命の尊厳について	
5回	解剖見学実習③	骨格、関節と韌帯	
6回	解剖見学実習④	筋系	
7回	解剖見学実習⑤	神経系	
8回	解剖見学実習⑥	内臓系	

成績評価	レポート課題100%	受講上のルール・留意点	実習に臨むにあたり、礼節を保ち、医療従事者を目指す者として態度に十分気をつけること。
------	------------	-------------	--

課題やレポートに関するフィードバック

レポート課題について、フィードバックは全体に実施する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	授業で使用した解剖学、生理学等の教科書		
参考書	授業で使用した解剖学、生理学等の教科書		
オフィスアワー	担当授業の前後		

科 目	病理学概論	単位・時間数	2 単位・30 時間
担当講師	アンドウカディ イマム	学 年	2 年・前期
実務経験	資格：医師	経験年数	医療機関 20年

教育目標	国家試験に出題される範囲内での病理学の基本的な知識を理解する
教育内容	

講義内容

回数	項目	講 義 内 容
1回	病理学概要、病因論	病理学の概念、診断病理、実験病理について理解する疾病的外因・内因を理解する
2回	退行性病変 進行性病変	変生、萎縮、壊死、アポトーシスについて学ぶ 肥大、過形成、化生、異型性及び再生について学ぶ
3回	代謝障害	生命を維持するための代謝及び代謝異常により引き起こされる病態について学ぶ
4回	循環障害	血液循環の基礎、局所循環障害の病因・病態について理解する
5回	循環障害 炎症	全身循環について学ぶ 炎症の経過と生体の反応を理解する
6回	感染症	感染症の成り立ち及び感染症を引き起こす主な病原体について理解する
7回	腫瘍	腫瘍の特徴、命名と分類、形態、悪性腫瘍の進展形式を学ぶ
8回	腫瘍	進行度、発生原因と発がんメカニズムを学ぶ
9回	先天異常・奇形	遺伝性疾患、染色体異常と奇形の基礎を学ぶ
10回	循環器	心臓の疾患を学ぶ
11回	循環器 呼吸器	血管の疾患を学ぶ 上気道、肺に見られる一部の疾患について学ぶ
12回	呼吸器	肺、胸膜に見られる疾患、腫瘍を学ぶ
13回	神経系	脳血管障害、中枢神経系の感染症、脱髄疾患などの病理学変化を学ぶ
14回	神経系 運動器	主要な神経変性疾患の病理学変化を学ぶ 骨、軟骨に見られる疾患について学ぶ
15回	運動器 全体復習	関節、筋肉の疾患について学ぶ

評価方法	受講態度、出席状況、中間テスト、定期試験を通して総合的に評価する
------	----------------------------------

教科書 標準理学療法・作業療法 専門基礎分野 病理学 梶原博毅 著 医学書院
参考書 ルーピン カラー基本病理学 エマニュエル・ルーピン著 河原ら翻訳 西村書店

科目	臨床心理学	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	小野寺 哲夫	学年	2年生 期
実績経験	資格 公認心理師・臨床心理士 Ph.D	神奈川県藤沢市教育委員会学校教育課所属学校訪問相談員として4年間、文科省認定スクールカウンセラーとして、神奈川県海老名市（8年）、大和市（3年）、鎌倉市（3年）の小中学校にて、児童生徒、保護者、教員の相談、およびカウンセリング、管理職に対するコンサルテーション等に従事してきた。2020年には国家資格公認心理師を取得。これらの実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う。	

授業の位置づけ	臨床心理学は、ケアの専門家、および医療専門職が現場で患者とかかわっていく上で必須の知識でありスキルである。授業では、臨床心理学の基礎知識に加えて、代表的な心理検査法や各種心理療法の基礎知識について、臨床現場での20年のカウンセラーとしての経験から得られた実践的なカウンセリングスキルやクライエントとのエピソードを交えて解説する。授業においては、アクティブラーニングの視点から心理テストやロールプレー等の実習を積極的に取り入れた、参加型の授業を展開する。また、PT/OTの国試対策も視野に入れて授業を行っていく。		
到達目標	PTの国家試験を見据えた上での臨床心理学の基礎理論、心理検査および心理療法の各種技法の習得。		
授業形態	講義・演習		遠隔授業

授業計画

回数	項目	講義内容	
1回	臨床心理学の概論	臨床心理学とは何か	臨床心理学の原則 臨床心理学の職業倫理
2回	臨床心理学の定義	臨床心理学の定義と臨床心理学の3つのパラダイム	
3回	フロイト精神分析①	フロイト精神分析の成り立ち	フロイトの局所論と構造論
4回	フロイト精神分析②	防衛機制（基礎）	代表的防衛機制
5回	フロイト精神分析③	防衛機制（応用）	転移と逆転移
6回	アタッチメント理論	ボウルビーのアタッチメント（愛着）	理論とウィニコットの対象関係論
7回	心理アセスメント①	心理検査の定義	信頼性と妥当性 心理検査の分類
8回	心理アセスメント②	知能検査、性格検査（質問紙法・投影法）、神経心理学的検査、作業検査	
9回	カール・ロジャーズ①	ロジャーズの経歴	自己理論 非指示療法から来談者中心療法まで
10回	カール・ロジャーズ②	セラピストの中核3条件	傾聴技法 十分に機能する人間
11回	交流分析①	交流分析（TA）の哲学	5つの自我状態の構造分析と機能分析
12回	交流分析②	ストローク分析	ストロークエコノミー OK牧場（人生の立場）
13回	森田療法	森田正馬の生涯	森田療法のキーワード 精神交互作用 生の欲望
14回	認知行動療法①	認知行動療法（CBT）の全体像	6つの基本原則 自動思考とスキーマ
15回	認知行動療法②	認知行動療法（CBT）の応用	認知再構成法と問題解決法

成績評価	筆記試験（90%）、毎回のミニレポート課題（10%）で評価する。	受講上のルール・留意点	毎回のミニレポート課題は、授業で学んだ内容について、感想や自分の意見、質問等を比較的自由に書いて提出する。毎回の授業と試験において、教科書は必ず使用する。
------	----------------------------------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック	
原則としては、毎回のミニレポート課題についてのフィードバックは行われないが、必要に応じて行う場合もある。	

教科書	書名	著書名	出版社名
教科書	『PT・OTのための臨床心理学テキスト（改訂）』	小野寺哲夫	JFA出版社
参考書	認知行動療法臨床ガイド	デヴィット・ウェストブルック	金剛出版
オフィスアワー	「授業前後の休憩時間」		

科目	内科学・老年学Ⅰ		単位・時間数	2単位・15時間
担当講師	本間 博		学年	2年生 前期
実績経験	資格 医師	日本内科学会認定内科医、日本循環器学会専門医、日本超音波医学会専門医、日本医師会認定産業医、日本心臓病学会特別会員。今までの医科大学での内科学講義、大学病院臨床経験を活かした授業を行う。		

授業の位置づけ	チーム医療でないと治療効果が得られないケースが多くなっている現状で、内科学・老年学を学ぶことは病態を理解し共有する点で重要である。 医療専門職として必要な内科疾患の病態・検査・治療について理解する。 また、高齢者が多くなり複数の病気を持つ場合が多いので老年学を通して高齢者の病態を理解できるようになることも大事である。 授業方法は講義中心で、課題も毎回提示する。		
到達目標	主要な内科疾患の概念を理解し、高齢者の特有な病態を説明できるようになる。 その上で検査、診断、治療といった過程を理解できるようになる。		
授業形態	講義		遠隔授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	内科学総論	内科学の概念、症候学、リハビリテーションとの関係を説明できる。
2回	老年学総論	老年学の概念、症候学、リハビリテーションとの関係を説明できる。
3回	感染症1	感染症総論：病原体の種類、感染の経過、感染経路、予防、治療を説明できる。
4回	感染症2	代表的な細菌感染症、ウイルス感染症、真菌感染症の病態、検査、治療を説明できる。
5回	循環器疾患1	循環生理、検査を説明できる。高血圧、メタボリックシンドロームの病態、治療の説明ができる。
6回	循環器疾患2	急性冠症候群（狭心症、心筋梗塞）の病態、検査、治療の説明ができる。
7回	循環器疾患3	弁膜症、先天性心疾患、心不全、不整脈の病態、検査、治療を説明できる。
8回	呼吸器疾患1	呼吸器の解剖、機能、検査の説明ができる。感染性肺疾患の病態、検査、治療を説明できる。
9回	呼吸器疾患2	慢性閉塞性肺疾患、拘束性肺疾患、呼吸不全の病態、検査、治療の説明ができる。腫瘍性肺疾患、アレルギー性肺疾患の病態、検査、治療を説明できる。
10回	消化器疾患1	消化器各臓器の解剖、機能、検査を説明できる。食道、胃の疾患の病態、検査、治療の説明ができる。
11回	消化器疾患2	小腸、大腸、腹膜疾患の病態、検査、治療を説明できる。
12回	肝、胆、脾臓疾患	肝、胆、脾の解剖、機能、検査を説明できる。各疾患の病態、検査、治療を説明できる。
13回	脳神経疾患1	脳神経の解剖、機能、症候、検査を説明できる。
14回	脳神経疾患2	脳血管障害の病態、検査、治療を説明できる。
15回	脳神経疾患3	脳腫瘍、脊髄疾患、脱髓・変性疾患の病態、検査、治療を説明できる。

成績評価	定期試験	受講上のルール・留意点	定期試験は五者択一の50題。毎回提示する課題も五者択一問題でトレーニングしていく。
------	------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック
事務局を通してメールで質問を受け付ける。

教科書	書名	著書名	出版社名
参考書			
オフィスアワー			

科目	内科学・老年学Ⅱ	単位・時間数	2単位・15時間
担当講師	本間 博	学年	2年生 後期
実績経験	資格	日本内科学会認定内科医、日本循環器学会専門医、日本超音波医学会専門医、日本医師会認定産業医、日本心臓病学会特別会員。今までの医科大学での内科学講義、大学病院臨床経験を活かした授業を行う。	
	医師		

授業の位置づけ	チーム医療でないと治療効果が得られないケースが多くなっている現状で、内科学・老年学を学ぶことは病態を理解し共有する点で重要である。医療専門職として必要な内科疾患の病態・検査・治療について理解する。また、高齢者が多くなり複数の病気を持つ場合が多いので老年学を通して病態を理解できるようになることも大事である。授業方法は講義中心で課題も毎回提示する。		
到達目標	主要な内科疾患の概念を理解し、高齢者の特有な病態も説明できるようになる。その上で検査、診療、治療の過程を理解できるようになる。		
授業形態	講義		遠隔授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	内分泌疾患1	内分泌器官の解剖、機能を説明できる。視床下部、下垂体疾患の病態、検査、治療を説明できる。
2回	内分泌疾患2	甲状腺、副腎、膵臓、卵巣、精巣疾患の病態、検査、治療を説明できる。
3回	糖尿病、代謝疾患	糖尿病、脂質代謝異常、痛風の病態、検査、治療を説明できる。
4回	アレルギー、免疫疾患	アレルギー、免疫のメカニズムを説明できる。アレルギー疾患、免疫不全症の病態、検査、治療を説明できる。
5回	膠原病1	膠原病の概念の変遷、病態、検査、治療を説明できる。
6回	膠原病2	関節リウマチ、全身性エリテマトーデス、シェーグレン症候群、強皮症、ペーチェットなどの疾患の病態、検査、治療を説明できる。
7回	腎、泌尿器疾患	腎臓、泌尿器の解剖、機能を説明できる。急性・慢性腎障害、腎不全、尿管・膀胱・前列腺疾患の病態、検査、治療を説明できる。
8回	血液浄化療法、臓器移植療法	急性腎不全症例による透析例が増加しているが、透析と移植の現状を理解する。
9回	血液疾患	血液・造血器疾患の概念の変遷、病態、検査、治療を説明できる。
10回	骨代謝と疾患、フレイル、ロコモティブ	骨の解剖、代謝を説明できる。骨粗鬆症の病態、検査、治療を説明できる。また、フレイル、ロコモティブを理解する。
11回	中毒、環境因子による疾患	中毒にはどのようなものがあり、環境要因がどのように関わっているのかを理解できる。
12回	緩和ケアと終末医療	終末医療は現在どうなっているのか、また緩和ケアの現状を理解する。
13回	IgG4関連疾患	新しい全身疾患として注目されているIgG4関連疾患について理解する。
14回	内科と皮膚疾患	内科疾患と皮膚疾患との関連について理解する。
15回	認知症	認知症とどう向き合うかを考え、理解する。

成績評価	定期試験	受講上のルール・留意点	定期試験は五者択一問題50題。毎回の課題も五者択一問題でトレーニングしていく。
------	------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック
事務局を通してメールで質問を受けつける。

	書名	著書名	出版社名
教科書			
参考書			
オフィスアワー			

科目	整形外科学Ⅰ	単位・時間数	2単位・30時間
担当講師	渋谷 一行	学年	2年生 前期
実績経験	資格 整形外科専門医、日本スポーツ協会公認スポーツドクター	診療経験（整形外科及びリハビリテーション科）、研究経験に基づいた講義を行う。	

授業の位置づけ	パワーポイントを使用して、極力実際の画像を供覧しながらの講義に努める。各期の最終回はレントゲン画像を学生に読影してもらう。適宜、小テストを行う。	
到達目標	国家試験合格水準到達はもちろんのこと、卒業後の就職先で十分活用できる知識獲得を目標とする。	
授業形態	講義、対面授業	

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	総論、臨床解剖学	整形外科学について、整形外科に関する解剖学
2回	整形外科学に関する基礎医学	骨、軟骨、関節、筋肉、韌帯、腱等に関して
3回	生体材料	整形外科に使用される生体材料に関して
4回	外傷学総論Ⅰ	軟部組織損傷に関して
5回	外傷学総論Ⅱ	骨組織損傷に関して
6回	骨折各論Ⅰ	上肢の骨折、脱臼に関して
7回	骨折各論Ⅱ	上肢及び下肢の骨折、脱臼に関して
8回	骨折各論Ⅲ	下肢の骨折、脱臼に関して
9回	骨・関節・軟部組織感染症	骨髓炎、化膿性関節炎、蜂窩織炎等に関して
10回	変形性関節症	変形性膝・股・肘関節症、ヘルニア結節等に関して
11回	末梢神経障害Ⅰ	上肢の末梢神経障害に関して
12回	末梢神経障害Ⅱ	下肢の末梢神経障害に関して
13回	スポーツ整形外科	スポーツ整形外科総論及びスポーツドクターとしての経験に関して
14回	レントゲン画像読影演習	前期講義関連関連症例の画像読影
15回	予備日	整形外科学関連トピックス（ロコモティブシンドロームなど）

成績評価	試験：100%、小テストは再試験か否かの参考にする。	受講上のルール・留意点	事前に資料を配付するので、予習をしてくること。
------	----------------------------	-------------	-------------------------

課題やレポートに関するフィードバック
特になし

書名	著書名	出版社名
教科書 整形外科学テキスト	高橋邦泰・芳賀信彦編	南江堂
参考書		
オフィスアワー 質問は講義中に受け付ける		

科目	整形外科学Ⅱ	単位・時間数	2単位・30時間		
担当講師	渋谷 一行	学年	2年生 後期		
実績経験	資格 整形外科専門医、日本スポーツ協会公認スポーツドクター	診療経験（整形外科及びリハビリテーション科）、研究経験に基づいた講義を行う。			
授業の位置づけ	パワーポイントを使用して、極力実際の画像を併覧しながらの講義に努める。各期の最終回はレントゲン画像を学生に読影してもらう。				
到達目標	国家試験合格水準到達はもちろんのこと、卒業後の就職先で十分活用できる知識獲得を目標とする。				
授業形態	講義、対面授業				

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	脊椎疾患	脊椎の臨床解剖学に関して
2回	脊椎疾患Ⅰ	頸椎疾患に関して
3回	脊椎疾患Ⅱ	胸椎疾患、側弯症に関して
4回	脊椎疾患Ⅲ	腰椎疾患に関して
5回	脊椎疾患Ⅳ	腰椎疾患に関して
6回	脊椎・脊髄損傷	頸・胸・腰椎骨折及び脊髄損傷に関して
7回	腫瘍	骨・軟部腫瘍、転移性骨腫瘍に関して
8回	小児整形外科Ⅰ	外部講師
9回	小児整形外科Ⅱ	外部講師
10回	骨粗鬆症	骨軟化症、くる病を含めた骨粗鬆症に関して
11回	関節リウマチ	膠原病を含めた関節リウマチに関して
12回	膝関節疾患	半月板損傷、韌帯損傷等に関して
13回	その他の疾患	その他の整形外科疾患（五十肩、痛風、外反母趾、骨端症等）に関して
14回	四肢循環障害、慢性疼痛疾患	閉塞性動脈硬化症、下肢静脈瘤、CRPS等に関して
15回	レントゲン画像読影演習	後期講義関連症例の画像読影

成績評価	試験：100%、小テストは再試験か否かの参考にする。	受講上のルール・留意点	事前に資料を配付するので、予習をしてくること。
------	----------------------------	-------------	-------------------------

課題やレポートに関するフィードバック			
特になし			

書名	著書名	出版社名
教科書 整形外科学テキスト	高橋邦泰・芳賀信彦編	南江堂
参考書		
オフィスアワー 質問は講義中に受け付ける		

科目	リハビリテーション医学概論Ⅱ	単位・時間数	単位・時間
担当講師	工藤征四郎・佐々木和裕	学年	2年生 前期
実績経験	資格		
	社会福祉士		

授業の位置づけ	この授業では、リハビリテーション概論に関する基本的知識を習得する。 社会福祉とは何か。他の政策との比較や歴史的経緯をもとに理解する。		
到達目標	リハビリテーション・社会福祉における基本的な概念や知識、理論を習得する。基本的な用語について、（丸暗記ではなく）よく理解して、自分の言葉で説明できるようとする。最終的に国の財政との関係について理解する。		
授業形態	講義	併用授業	

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	福祉・医療・保健等の状況	リハビリテーションと深い関連を有する福祉・医療・保健等の状況
2回	福祉・医療・保健等の状況	日本の高齢化の進展と少子化の現状
3回	福祉・医療・保健等の状況	日本の高齢化対策
4回	福祉・医療・保健等の状況	障害者の現状
5回	福祉・医療・保健等の状況	介護保険について
6回	福祉・医療・保健等の状況	後期高齢者医療制度
7回	福祉・医療・保健等の状況	国民医療費の動向
8回	社会保障の歴史的経緯	日本の社会保障の歴史的経緯 飛鳥～江戸時代
9回	社会保障の歴史的経緯	日本の社会保障の歴史的経緯 第二次世界大戦以降
10回	社会保障の国際比較	日本の社会保障の国際比較その他
11回	将来の問題点	今後の社会保障の行方
12回	国の経済や財政力	財政再建
13回	国の経済や財政力	日本の抱える諸問題 福祉・医療・保健等の状況
14回	診療報酬	国民医療費増加抑制対策
15回	診療報酬	リハビリテーションに関する診療報酬の現状

成績評価	定期試験：筆記試験100%	受講上のルール・留意点	授業では、確認の問題を行うことがある。講義をよく聞きできるだけメモを取るようにする。私語で回りに迷惑をかけないこと。
------	---------------	-------------	--

課題やレポートに関するフィードバック

--

書名	著書名	出版社名
教科書 リハビリテーション概論（手作り最新版）	工藤征四郎 授業前に配布	
参考書		
オフィスアワー 授業前後の休憩時間		

科 目	神経内科学	単位・時間数	2 単位・30 時間
担当講師	斎藤史明／真先敏弘	学 年	2 年・前期
実務経験	資格：医師	経験年数	病院

教育目標	リハビリテーション医療に必要な神経内科領域の知識、診察技術を習得させる。
教育内容	指定教科書および最新情報を含むプリント資料、スライド教材、ビデオ教材などを用いて、臨床に生かせる講義を行う。

講義内容

回数	項目	講師	講 義 内 容
1回	神経内科学総論 1	真先	神経内科学序論、神経学的診察・検査法
2回	神経内科学総論 2	真先	運動麻痺と筋萎縮
3回	神経内科学総論 3	真先	錐体外路障害、運動失調
4回	神経内科学総論 4	真先	感覚障害
5回	神経内科学総論 5	真先	意識障害、高次脳機能障害
6回	神経内科学総論 6	真先	脳神経障害、構音・嚥下障害、めまい
7回	神経内科学各論 1	真先	脳血管障害 1・脳梗塞
8回	神経内科学各論 2	斎藤	脳血管障害 2・脳出血
9回	神経内科学各論 3	斎藤	認知症
10回	神経内科学各論 4	斎藤	パーキンソン病と他の不随意運動症
11回	神経内科学各論 5	斎藤	筋萎縮性側索硬化症、脊髄小脳変性症
12回	神経内科学各論 6	斎藤	ニューロパチーとミエロパチー
13回	神経内科学各論 7	斎藤	多発性硬化症、ギラン・バレー症候群
14回	神経内科学各論 8	斎藤	筋ジストロフィーとその他の筋疾患
15回	神経内科学各論 9	斎藤	その他の疾患

定期試験は別日程にて実施

評価方法	
------	--

教科書 指定なし

参考書 「標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 神経内科学」第3版 川平和美編 (医学書院)
 「リハビリテーションのための神経内科学」第2版 安藤一也・杉村公也著 (医歯薬出版)
 「クリニカルアイ 神経内科」古川哲雄・三苦博著 (医学評論社)

科目	小児科学	単位・時間数	1単位・15時間
担当講師	江添 隆範	学年	2年生 後期
実績経験	資格	昭和62年より、小児科医師として病院勤務。治療の経験を活かし、講義を行う。	
	小児科医師		

授業の位置づけ	治療に理学療法、作業療法が重要な役割を果たす小児、思春期の疾患について講義形式で習得する。	
到達目標	小児の正常な発育、発達を知る。小児に特有な疾患を理解する。	
授業形態	講義	対面授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	小児の特性、発達	発達、発育（正常）について、小児保健、小児によくみられる症状など
2回	小児保健、小児の注意すべき症状、治療	新生児の特徴、低出生体重児、遺伝について学び直す
3回	遺伝学、新生児	脳奇形、てんかん、筋疾患（筋シストロフィ症、ミオパチー）など
4回	神経、筋疾患	自閉性障害、AD/HD、先天性心疾患を中心に
5回	心疾患、感染症、呼吸器	小児期に多い感染症
6回	消化器疾患、内分泌疾患	ホルモンの異常による小児疾患、貧血、白血病、血友病など
7回	血液・腫瘍疾患、アレルギー疾患	ぜん息、アトピー性疾患
8回	腎疾患、重症心身障害	腎炎、ネフローゼなど、重症心身障害の定義、身体的特徴と治療

成績評価	筆記試験100%	受講上のルール・留意点	
------	----------	-------------	--

課題やレポートに関するフィードバック

課題やレポートに関するフィードバック

	書名	著書名	出版社名
教科書	PT・OTの小児科学の最新版	医学勝因	
参考書			
オフィスアワー	授業後の休憩時間		

科 目	精神医学	単位・時間数	2単位・ 30時間
担当講師	大高 靖史	学 年	2年生 前期
実績経験	資格 精神保健福祉士、 公認心理師	H20年（財）国立精神神経科学振興財團へ入職。同年より日本医科大学付属病院精神神経科の精神保健福祉士として勤務。主に救命救急センターにおける自殺未遂者支援への介入研究に従事。H24年より現職（日本医科大学付属病院 精神神経科）。精神神経科の外来・入院患者の他、救命救急センター入院患者を中心としたコンサルテーションリエゾン対応など広く相談業務に従事。 その他、文京区保健サービスセンター（精神科デイケアにおけるグループワーク）、日本福祉教育専門学校、日本リハビリテーション専門学校 非常勤講師、等。（社会活動等）日本自殺予防学会 文京救急患者精神科継続支援研修委員、文京区自殺対策計画策定委員、台東区自殺対策委員、荒川区自殺未遂者支援連絡会 委員、東京精神保健福祉士協会 自殺対策委員会・研修委員会 委員 上記の実務経験をもとに講義を進めていきます。	
授業の位置づけ	医療・福祉分野で業務を行う専門家（理学療法士）として遭遇する可能性がある精神疾患について、国家試験で問われる水準の知識（症候学、診断学、治療学）を理解する。		
到達目標	精神医学の概論を理解でき、必要最低限な知識を習得している。 代表的な精神疾患・障害を理解し、その違いや、対処法、治療法を説明できる。 精神疾患における人権擁護の重要性を理解する。 学習によって得られた知識により、疾患により苦しむ人々に対する一定の理解ができる。		
授業形態	講義	「対面授業」もしくは「遠隔授業」	

授業計画

回数	項目	講義内容	
1回	精神医学総論(導入)	精神医学とは何か、学ぶ意義、意味も含め、本学問領域について総説する。	
2回	"		
3回	統合失調症	精神科領域で対応されている各疾患について、原因、症状、治療とその対応について概説する。	
4回	"		
5回	"		
6回	気分障害		
7回	"		
8回	脳器質性症状性精神障害		
9回	神経症性障害		
10回	"		
11回	精神作業物質・物質関連精神障害		
12回	精神発達遅滞・発達障害		
13回	精神科リハビリテーション概論	精神科領域で行われているリハビリテーションについて概説する。	
14回	精神療法(総説)	精神科的治療で用いられることが多い各精神療法について概説する。	
15回	講義のまとめ	講義のふりかえりとまとめ	

成績評価	期末試験 (100%)	受講上のルール・留意点	授業時間数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない。
------	-------------	-------------	-----------------------------

課題やレポートに関するフィードバック

FBは全体に実施する。

教科書	書名 精神医学 第4版	著書名 上野 武治 編	出版社名 医学書院
参考書	理学療法士・作業療法士国家試験必修ポイント 専門基礎分野 臨床医学 2021	医歯薬出版 編	医歯薬出版
オフィスアワー			

科目	検査測定法Ⅲ（神経・中枢）		単位・時間数	1単位・ 30時間			
担当講師	塩澤 和人、鈴木 雅男		学年	2年生 前期			
実績経験	資格	塩澤 和人：実務経験 15年 理学療法士として、回復期病棟、急性期病院、デイサービス、障害者福祉施設、介護予防事業、教育機関に携わった実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う。					
	理学療法士	鈴木 雅男：実務経験 35年 理学療法士として、一般病院、総合病院、教育機関に常勤として勤務。非常勤として市・区の保健センター、介護老人保健施設、訪問リハビリテーションにて勤務歴があり、急性期から維持期にかけての経験から授業を行う。					
授業の位置づけ	<p>脳卒中の病巣症状としては運動障害、感覚障害、言語障害、膀胱直腸障害などがあるが、理学療法を進めていくにあたっては、運動障害を中心とした治療プログラムが作成され、その他の障害を多角的に考慮する必要がある。</p> <p>本授業では、中枢神経系障害に関する理学療法を実施する上で必要と思われる片麻痺運動機能検査、脳神経検査、筋緊張検査、協調性検査、感覚・反射検査について、実技を交えて解説する。</p> <p>神経系の分類、中枢神経系の障害、大脳・基底核・小脳・脳幹など中枢神経系の解剖および生理学的な事項を確認しておくこと。</p> <p>授業方法は、「講義」「実技」を行う予定である。</p>						
到達目標	<p>1. 神経系の分類、脳機能、週数神経系の障害を説明できる。 2. 片麻痺運動機能検査、脳神経検査、筋緊張検査、協調性検査、感覚・反射検査を実施でき結果の解釈ができる。</p>						
授業形態	講義・演習		対面授業				

授業計画

回数	項目	講義内容	
1回	脳神経総論・各論	神経系の分類、中枢神経系の障害、大脳・基底核・小脳等の解剖、生理	
2回	知覚検査①	感覚の種類、表在感覚（触覚・痛覚等）	
3回	知覚検査②	深部感覚（運動覚・位置覚・振動覚）、複合感覚	
4回	反射検査①	反射の定義・種類、深部腱反射	
5回	反射検査②	表在反射、病的反射	
6回	脳神経検査①	嗅神経、視神経、動眼・滑車・外転神経	
7回	脳神経検査②	三叉神経、顔面神経	
8回	脳神経検査③	内耳神経、舌咽・迷走神経、副神経、舌下神経	
9回	片麻痺運動機能検査①	共同運動と連合反応、ブルンストロームテスト（上肢）	
10回	片麻痺運動機能検査②	ブルンストロームテスト（手指）	
11回	片麻痺運動機能検査③	ブルンストロームテスト（下肢）	
12回	筋緊張検査①	筋トーネスの基礎・異常、被動性検査、懸振性検査	
13回	筋緊張検査②	筋硬直の検査、伸展性の検査、姿勢性筋トーネス検査	
14回	協調性検査①	協調性障害、運動失調検査（姿勢、歩行、日常生活動作の観察、四肢の運動失調検査）	
15回	協調性検査②	運動失調検査（共同運動不能、測定障害、変換運動障害）、その他の検査	

成績評価	定期試験：筆記試験90% 小テスト10%	受講上のルール・留意点	実技では動きやすい服装（基本は短パン、Tシャツ）の準備をすること。
------	-------------------------	-------------	-----------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック	
実技に関するフィードバックは実技練習中、練習の後、個別または全体に対して適宜実施する。	

教科書	書名 理学療法評価学 改訂第6版 ベッドサイドの神経の診かた 改訂18版	著書名 松澤 正、江口勝彦 著 田崎義昭、齊藤桂雄、坂井文彦 著	出版社名 金原出版 南山堂
参考書	病気がみえる⑦脳・神経 第2版	医療情報科学研究所 編	メディア クメディ
オフィスアワー	担当授業の前後		

科 目	検査測定法IV【整形・動作】		単位・時間数	1単位・30時間			
担当講師	土手 延恭		学 年	2年生 前期			
実績経験	資格	実務経験 17年 整形外科急性期・慢性期・外来リハ・通所リハ・訪問リハ・介護予防教室運営を経験、現在非常勤として整形外科クリニック・有料老人ホームでの臨床業務を行っている。その現場での実務経験を踏まえて講義・演習を行う。					
	理学療法士						
授業の位置づけ	<p>理学療法分野では、整形外科（運動器）疾患・脳血管疾患・呼吸器疾患・循環器疾患の患者が多い。この授業で扱う整形外科分野では、とりわけ「痛み」が原因で受診する患者が多い。整形外科医師も整形外科テストを行うが、医師の場合は診断に利用する。理学療法士の場合は、機能評価・理学療法の効果検証として行う側面が多い。</p> <p>整形外科疾患は、外傷でも非外傷でも起こりうるが、1年次に学んだ検査測定法Ⅰ・Ⅱと合わせて評価するより状態の把握ができるようになる。</p> <p>臨床では、様々な疾患・症状をもつ患者様とお会いする。3年時の臨床実習Ⅰ以降、スムーズに現場で検査を行えるようオリエンテーションから演習していく。</p> <p>学生は1年次に解剖学・生理学・運動学といった専門基礎を学んでいる。その知識を復習しながら、整形外科テストを学び、関節可動域測定や徒手筋力検査、その他の評価と合わせて演習から体験していく。</p>						
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 解剖学・生理学・運動学の知識から整形外科テストで何が分かるのか説明することができる。 2. 他の検査結果と合わせて考え、患者の状態を理解することができる。 3. 様々な基本動作を分析し、その機能障害を説明することができる。 						
授業形態	講義・演習		対面授業				

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	姿勢分析①	演習：学生同士でお互いの逸脱所見を観察・記載
2回	動作分析②	演習：学生同士でお互いの逸脱所見を観察・記載
3回	頸部（1）	演習：頸部の整形外科テストを実施①
4回	頸部（2）	演習：頸部の整形外科テストを実施②
5回	肩関節（1）	演習：肩関節の整形外科テストを実施①
6回	肩関節（2）	演習：肩関節の整形外科テストを実施②
7回	肘・手関節（1）	演習：肘・手関節の整形外科テストを実施①
8回	肘・手関節（2）	演習：肘・手関節の整形外科テストを実施②
9回	胸椎・腰椎（1）	演習：胸椎・腰椎の整形外科テストを実施①
10回	胸椎・腰椎（2）	演習：胸椎・腰椎の整形外科テストを実施②
11回	骨盤・股関節（1）	演習：骨盤・股関節の整形外科テストを実施①
12回	骨盤・股関節（2）	演習：骨盤・股関節の整形外科テストを実施②
13回	膝・足関節（1）	演習：膝・足関節の整形外科テストを実施①
14回	膝・足関節（2）	演習：膝・足関節の整形外科テストを実施②
15回	総復習	総合演習：学生同士、相手の姿勢・動作から必要な検査を導き出し実施

成績評価	定期筆記試験 70% 小テスト 10% 発表 10% レポート課題 10% 合計 100%	受講上のルール・留意点	1. 授業では毎回リフレクションシートの記載を課すので提出期日までに提出すること。 2. 実技では動きやすい服装（基本は短パン、Tシャツ）の準備をすること。その際に臨床業務に影響のある身だしなみはしないこと（アクセサリを外す、長い髪は束ねる等、その他必要に応じてアルコール消毒するなど感染予防に努めること）。
------	---	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック			
実技演習に関しては、机間巡回中に行う。またリフレクションシートには、質問欄を設けているので、その記載に合わせてフィードバックを行う。疑問・質問に関しては、メールで随時対応、時間外にも対応する。			

教科書	書名	著書名	出版社名
参考書	病態動画から学ぶ 臨床整形外科テスト	吉田一也、隅元庸夫	HUMAN PRESS
参考書	写真で学ぶ 整形外科テスト法 増補改訂新版	ジョーゼフ・J・シプリアーノ	医道の日本社
オフィスアワー	研修日(火曜日)、午後から出勤(教員室滞在) メールでの連絡は随時 n-date@nichireha.ac.jp	※その他、理学療法評価のテキスト参照	

科目	検査測定法演習Ⅰ		単位・時間数	1単位・30時間			
担当講師	塩澤 和人、鈴木 雅男		学年	2年生 前期			
実績経験	資格	塩澤 和人：実務経験 15年 理学療法士として、回復期病棟、急性期病院、デイサービス、障害者福祉施設、介護予防事業、教育機関に携わった実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う。					
	理学療法士	鈴木 雅男：実務経験 35年 理学療法士として、一般病院、総合病院、教育機関に常勤として勤務。非常勤として市・区の保健センター、介護老人保健施設、訪問リハビリテーションにて勤務歴があり、急性期から維持期にかけての経験から授業を行う。					
授業の位置づけ	<p>理学療法における評価は“診たてる”ことであり、さまざまな情報を収集する課題解決手段である。しばしば、“理学療法は評価に始まり評価に終わる”といわれ、評価は安全で効果的な治療・介入を保証する要件となる。</p> <p>本授業は1年生で学んだ理学療法評価・検査法について、検査の目的や意義を理解し、適切に実践し臨床の場で活用できるように主にグループで再学習する授業である。</p> <p>今まで学習した各検査法について、目的、方法、結果の解釈を確認しておくこと。</p> <p>授業方法は、グループを主体とした「実技」「演習」を行う。 各検査において、測定練習を行い、次の授業でOSCE (objective structured clinical examination:客観的臨床能力試験) を実施し臨床能力を養う。</p>						
到達目標	<p>1. 各検査法について目的・意義が説明できる。 2. 各検査法について模擬患者を対象に実践できる。 3. 各検査法の結果を解釈、統合できる。</p>						
授業形態	演習		対面授業				

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	問診	医療面接 OSCE バイタルは毎回授業の前後に計測
2回	形態測定①	肢長・周径 測定練習
3回	形態測定②	肢長・周径 OSCE
4回	呼吸器・循環器①	聴診、打診、心電図のみかた、運動負荷試験 (METSなど)
5回	呼吸器・循環器②	脈拍と血圧、呼吸パターン OSCE
6回	ROM①	上肢 測定練習
7回	ROM②	上肢 OSCE
8回	ROM③	下肢 測定練習
9回	ROM④	下肢 OSCE
10回	MMT①	上肢 測定練習
11回	MMT②	上肢 OSCE
12回	MMT③	下肢、頸部、体幹 測定練習
13回	MMT④	下肢、頸部、体幹 OSCE
14回	ケーススタディ	整形疾患 必要な検査項目の抽出、実践
15回	ケーススタディ	中枢疾患 必要な検査項目の抽出、実践

成績評価	レポート課題100%	受講上のルール・留意点	実技では動きやすい服装（基本は短パン、Tシャツ）の準備をすること。
------	------------	-------------	-----------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック
実技に関するフィードバックは実技練習中、練習の後、グループまたは全体に対して適宜実施する。

書名	著書名	出版社名
教科書	各授業で使用した教科書	
参考書	各授業で使用した教科書	
オフィスアワー	担当授業の前後	

科目	検査測定法演習Ⅱ		単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	塩澤 和人、鈴木 雅男		学年	2年生 後期
実績経験	資格	塩澤 和人：実務経験 15年 理学療法士として、回復期病棟、急性期病院、デイサービス、障害者福祉施設、介護予防事業、教育機関に携わった実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う。		
	理学療法士	鈴木 雅男：実務経験 35年 理学療法士として、一般病院、総合病院、教育機関に常勤として勤務。非常勤として市・区の保健センター、介護老人保健施設、訪問リハビリテーションにて勤務歴があり、急性期から維持期にかけての経験から授業を行う。		

授業の位置づけ	理学療法における評価は“診たてる”ことであり、さまざまな情報を価値づける課題解決手段である。しばしば、“理学療法は評価に始まり評価に終わる”といわれ、評価は安全で効果的な治療・介入を保証する要件となる。本授業は2年生で学ぶ理学療法評価・検査法について、検査の目的や意義を理解し、適切に実践し臨床の場で活用できるように主にグループで再学習する授業である。 今まで学習した各検査法について、目的、方法、結果の解釈を確認しておくこと。 授業方法は、グループを主体とした「実技」「演習」を行う。 各検査において、測定練習を行い、次の授業でOSCE (objective structured clinical examination:客観的臨床能力試験) を実施し臨床能力を養う。		
到達目標	1. 各検査法について目的・意義が説明できる。 2. 各検査法について模擬患者を対象に実践できる。 3. 各検査法の結果を解釈、統合できる。		
授業形態	演習		対面授業

授業計画

回数	項目	講義内容	
1回	疼痛、整形外科検査①	脊柱、下肢、上肢 測定練習	
2回	疼痛、整形外科検査②	整形外科検査 OSCE	
3回	感觉検査①	表在・深部感觉 測定練習	
4回	感觉検査②	表在感觉検査 OSCE	
5回	感觉検査③	深部感觉検査 OSCE	
6回	反射検査①	深部腱反射、病的反射 測定練習	
7回	反射検査②	深部腱反射、病的反射 OSCE	
8回	中枢神経系検査①	片麻痺機能検査、筋トーネス検査、SIAS 測定練習	
9回	中枢神経系検査②	片麻痺機能検査 OSCE	
10回	中枢神経系検査③	SIAS OSCE	
11回	中枢神経系検査④	脳神経系検査 測定練習	
12回	中枢神経系検査⑤	脳神経系検査 OSCE	
13回	中枢神経系検査⑥	協調性検査 測定練習	
14回	中枢神経系検査⑦	協調性検査 OSCE	
15回	中枢神経系検査⑧	バランス検査 測定練習 OSCE	

成績評価	レポート課題100%	受講上のルール・留意点	実技では動きやすい服装（基本は短パン、Tシャツ）の準備をすること。
------	------------	-------------	-----------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック	
実技に関するフィードバックは実技練習中、練習の後、グループまたは全体に対して適宜実施する。	

教科書	書名	著書名	出版社名
参考書	各授業で使用した教科書		
オフィスアワー	各授業で使用した教科書		
	担当授業の前後		

科 目	総合演習Ⅱ		単位・時間数	1単位・ 30時間
担当講師	鈴木 雅男		学 年	2年生 前・後期
実績経験	資格	実務経験 35年 理学療法士として、一般病院、総合病院、教育機関に常勤として勤務。非常勤として市・区の保健センター、介護老人保健施設、訪問リハビリテーションにて勤務歴があり、急性期から維持期にかけての経験から授業を行う。		
	理学療法士			

授業の位置づけ	<p>この授業はPBLチュートリアルの学習システムを活用し、症例情報を基に今まで学んだ医学的基礎知識や理学的評価の理解を深め、さらに疑問に思ったことに対して自ら学んでいく。またその過程で理学療法士の臨床思考を身につけていくことを目的にしている。</p> <p>主に以下の症例について学習する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 整形疾患（股関節または膝関節） 2. 中枢神経疾患（片麻痺） 		
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 症例情報から評価項目を選択できる。 2. 評価情報から問題点をICFにまとめられる。 3. 評価結果からゴール設定、プログラムの立案ができる。 		
授業形態	講義・演習		対面授業

授業計画

回数	項目	講義内容	
1回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業	
2回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業	
3回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業	
4回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業	
5回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業	
6回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業	
7回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業	
8回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業	
9回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業	
10回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業	
11回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業	
12回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業	
13回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業	
14回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業	
15回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業	

成績評価	授業内発表：50% レポート：50%	受講上のルール・留意点	授業中は私語を避けて授業に集中する。 グループワーク課題は積極的に行う。
------	-----------------------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック	
フィードバックは全体に行う。	

	書名	著書名	出版社名
教科書	なし		
参考書			
オフィスアワー	質問や在室状況はメールで確認 m-suzuki@nichireha.ac.jp		

科目	疾患別理学療法 I-A	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	米村 豊、阿部 靖	学年	2年生 後期
実績経験	資格	平成20年から整形外科領域で培った知識と技術を提供するとともに、この経験を活かし学生自身で考え行動できる内容の授業を提供する。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	整形外科疾患の理学療法評価・運動療法の知識・技術の習得。	
到達目標	整形外科疾患における理学療法評価・運動療法を考察、説明、実践できる。	
授業形態	対面を基本とする	

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	肩関節疾患	肩関節周囲炎、腱板断裂などの病態と障害像を学ぶ。 肩関節疾患の理学療法評価・治療法を学ぶ。
2回		
3回		
4回	肘・手関節疾患	上腕骨外側上顆炎、TFCC損傷などの病態と障害像を学ぶ。 肘・手関節疾患の理学療法評価・治療法を学ぶ。
5回		
6回	頸部疾患	
7回		頸椎症、後縦韌帯骨化症などの病態と障害像を学ぶ。 頸部疾患の理学療法評価・治療法を学ぶ。
8回	胸椎・胸郭疾患	
9回		胸椎側弯症、後弯症などの病態と障害像を学ぶ。 胸椎・胸郭疾患の理学療法評価・治療法を学ぶ。
10回	腰部疾患疾患	
11回		腰椎椎間板ヘルニア、脊柱管狭窄症などの病態と障害像を学ぶ。 腰部疾患の理学療法評価・治療法を学ぶ。
12回		
13回	脊髄損傷	
14回		脊髓損傷の病態と障害像を学ぶ。 脊髓損傷の理学療法評価・治療法を学ぶ。
15回		

成績評価	定期試験	受講上のルール・留意点	教科書のほか、配布資料を使用 解剖学・運動学の理解を深めておくこと
------	------	-------------	--------------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック	
適宜	

	書名	著書名	出版社名
教科書	運動器の運動療法	小柳磨毅ほか	羊土社
参考書			
オフィスアワー	メールでの連絡は随時 y-abenichireha.ac.jp		

科目	疾患別理学療法Ⅲ-B	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	齋藤 雄	学年	2年生 前期
実績経験	資格 理学療法士	理学療法士として病院にて積極的に治療を行っている実務経験を活かし、臨床現場のリアルな状況や実例を交えながら講義を行う。	

授業の位置づけ	<p>「難病」と呼ばれる神経・筋疾患の症例は、臨床の現場でも担当する機会が大変多くあります。原因は様々で、まだ解明されていない疾患も大変多く存在します。数ある神経・筋疾患の中でも、臨床の現場で比較的多く見られる疾患にフォーカスし、病態理解、リハビリテーション評価と治療プログラムについて講義をします。</p> <p>突如身边に「死」が迫ったり、今後元の生活に戻れなかつたり、対象となる方の精神的な落ち込みは想像を絶する場面が多くあります。骨折などのリハビリテーションとは違い、明るい未来が約束できない、思い描けない難病を患った方に対して、どのようなアプローチをしたら良いのか。現場で経験したリアルな話を踏まえて、「疾患」への科学的な側面でのアプローチと、「人間」への精神心理的なアプローチ方法を学び、臨床の現場に役立てていけるような講義を行います。</p>		
到達目標	疾患の特徴を理解したうえで神経・筋疾患の理学療法について学習し、各疾患における評価・治療プログラム立案を実施できるようになる。		
授業形態	講義	対面と遠隔の併用授業	

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	神経系の構造と基礎	神経系の構造や機能など、基礎的な知識の復習
2回	脱髓性疾患	脱髓性疾患の原因と病態理解
3回	多発性硬化症	多発性硬化症の原因と病態理解、評価法、治療プログラム
4回	末梢神経障害	末梢神経障害の原因と病態理解
5回	ギランバレー症候群	ギラン・バレー症候群の原因と病態理解、評価法、治療プログラム
6回	シャルコー・マリー・トゥース病	シャルコー・マリー・トゥース病の原因と病態理解
7回	筋疾患	筋疾患についての原因と病態理解
8回	多発性筋炎・皮膚炎	多発性筋炎・皮膚筋炎の原因と病態理解、評価法、治療プログラム
9回	筋ジストロフィーの概要	筋ジストロフィーの原因と種類、病態理解
10回	筋ジストロフィーの評価/治療	筋ジストロフィーの評価法、治療プログラム
11回	筋強直性ジストロフィー	筋強直性ジストロフィーの原因と病態理解
12回	筋萎縮性側索硬化症の概要	筋萎縮性側索硬化症の原因と種類、病態理解
13回	筋萎縮性側索硬化症の評価/治療	筋萎縮性側索硬化症の評価法、治療プログラム
14回	重症筋無力症	重症筋無力症の原因と病態理解、評価法、治療プログラム
15回	まとめ・総括	復習・総括

成績評価	筆記試験 (100%)	受講上のルール・留意点	授業時間数の3分の1以上欠席した者には筆記試験の受験資格を与えない。
------	-------------	-------------	------------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック
都度、全体に実施する。

書名	著書名	出版社名
教科書 神経障害理学療法学Ⅱ 神経筋障害	中山 恭秀・鈴木 俊明 編	メディカル・ピューラ
参考書 病気がみえる vol.7 脳・神経 第2版	医療情報科学研究所	メディア
オフィスアワー 授業前後の休憩時間		

科目	運動療法学Ⅱ		単位・時間数	1単位・ 30時間
担当講師	畠山 敦		学 年	2年生 後期
実績経験	資格	1985理学療法士免許習得37年目となる。責任者として急性期病院で施設認可を2か所取得(他OTの認可も立ち会う)。主として、急性期の脳卒中患者さんを中心に整形外科等、地域の中核病院を12年ほど経験してきた。平成9年、疼痛治療のため鍼灸の夜学を卒業、同年から教育機関歴25年目である。		
	理学療法士・鍼師・灸師			

授業の位置づけ	各病態の概要を踏まえた運動療法の特徴と運動療法の種類を学習する。		
到達目標	各病態を理解し基本的な運動療法を学習する。		
授業形態	講義・実習		対面授業

授業計画

回数	項目	講義内容	
1回	全身持久力	目的、適応、禁忌、注意点	
2回		有酸素運動とその効果、強度の設定	
3回	中枢性運動麻痺	中枢性運動麻痺の病態	
4回		中枢性運動麻痺の病態	
5回		中枢性運動麻痺の運動療法	
6回		中枢性運動麻痺の運動療法	
7回	末梢神経性運動麻痺	末梢神経性運動麻痺の病態	
8回		末梢神経性運動麻痺の運動療法	
9回	バランス障害	協調運動障害の病態	
10回		協調性運動障害の運動療法	
11回	協調性運動障害	協調性運動障害の病態	
12回		協調性運動障害の運動療法	
13回	高齢者	高齢者の特徴と運動療法	
14回		高齢者の運動療法	
15回	まとめ		

成績評価	筆記試験80%、提出物20% 欠格要件（授業時間1/3以上の結石者には単位を与えない）	受講上のルール・留意点	他者に対する礼儀と配慮、必要であれば補講又は実技練習を設ける。疾患の概要理解のために文献の抄読、およびグループ発表。
------	---	-------------	--

課題やレポートに関するフィードバック
メールでの添付にて提出、添削によるフィードバック

書名	著書名	出版社名
教科書 運動療法学 障害別アプローチの理論と実際 第2版	市橋則明	文光堂
参考書		
オフィスアワー 担当授業の前後		

科目	物理療法学	単位・時間数	1単位・15時間
担当講師	小川 博史	学 年	2年生 前期
実績経験	資格	実務経験 25年 理学療法士として、総合病院・老健・訪問リハ・デイケア・整形外科クリニック・教育機関での実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	<p>現在、リハビリテーション業務の中で、理学療法士の活動範囲は多岐にわたっている。その根幹である理学療法技術の両翼として運動療法・物理療法が存在している。</p> <p>物理療法は、歴史的に古くから用いられてきた物理エネルギーを用いた治療法であり、現在でも多く臨床現場で行われている。物理療法の適応を正確に理解し、リハビリテーション専門職として、診療の補助として、より良い患者治療が出来ることが必要である。</p> <p>この講義では、講義・演習を通じて、実際の治療機器を使用し、物理療法を体験しながら学習する。</p>		
到達目標	<p>物理療法の各治療法を知り、その機器を扱うことができる。</p> <p>治療に必要な技術・知識を獲得し各治療法とむすびつけ理解する。</p>		
授業形態	講義・演習		併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	概論・温熱療法	物理療法の基礎・原理 ホットパック・パラフィン
2回	温熱療法	超短波・マイクロ波・超音波
3回	光線・寒冷療法	赤外線・紫外線・レーザー・アイスピック
4回	寒冷・水治療法	アイスマッサージ・過流浴他
5回	電気療法	基礎・低周波・干渉波・TES
6回	電気療法	FES・BDS・フィードバック
7回	牽引療法・CPMなど	頸椎牽引・腰椎牽引・CPM・その他物理療法
8回	まとめ	

成績評価	試験 1回 80% レポート 数回 20% (2回程度)	受講上のルール・留意点	試験は記述、穴埋め、計算を含んだ講義全般に対する問題とする。 レポートについては、治療法に必要な情報のまとめ、関連する事項について800文字程度にまとめて作成する。
------	------------------------------------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック
全体にフィードバックを行う。

	書名	著書名	出版社名
教科書	理学療法ゴールドマスターテキスト3 物理療法学	柳澤 健	メディカル ピュー
参考書			
オフィスアワー			

科 目	日常生活活動学 I		単位・時間数	1単位・ 30時間
担当講師	篠田 良平		学 年	2年生 後期
実績経験	資格	篠田 良平 実務経験 27年 理学療法士として、回復期病院、総合病院、教育機関に常勤として勤務。実務経験を活かし実例を交えながら講義を行う。 塩澤 和人：実務経験 15年 理学療法士として、回復期病棟、急性期病院総合病院、デイサービス、障害者福祉施設、教育機関に携わった実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う。		
	理学療法士			

授業の位置づけ	<p>この授業では、日常生活動作（以下ADL）の知識と技術の基礎を学習する。この教科の基本概念となる生活の質（QOL）について理解し、関連した知識を学び、寝返りや歩行・炊事や買い物のような日常生活を医療的視点から見つめ直す。日常生活を論理的・現実的に分類するために国際生活機能分類（ICF）を学ぶ。日常生活の変化を評価し理学療法に反映させるためのツールとしてバーセルインデックス（BI）・機能的自立度評価表（FIM）を学ぶ。見学実習や臨床実習で患者様と接する際の基本的技術として介護法を学ぶ。</p> <p>授業方法はプリント・パワーポイントを主とした講義形式で、ICF・BI・FIMの講義後には分類や採点に関し実際の状況を想定して2人以上のグループでディスカッションを行う。車椅子駆動と杖歩行に関して患者様の状態を体験するための演習を行う。実技では基本的に2人組で杖歩行のを行い方や介護法を学ぶ。</p>		
到達目標	<p>○リハビリテーションにおけるADLの関わりを理解している 分類とBI・FIMの採点を行える 動・杖歩行や介護に関して相手に説明しながら行える</p> <p>○ICFの ○車椅子駆動</p>		
授業形態	講義・演習		対面授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	ADLと概念	ADLの位置づけ、概念、分類
2回	ADLと概念	QOLと構造
3回	障がいの定義と分類	障がいの定義、ICIDH・ICFについて
4回	障がいの定義と分類	ICFの分類法（グループワーク）
5回	ADL評価	ADL評価の目的、役割
6回	ADL評価	Barthel Indexの特徴・配点
7回	ADL評価	FIMの特徴・判定基準
8回	ADL評価	Barthel IndexとFIMの評価法（グループワーク）
9回	ADL評価	その他の評価法、評価の実際
10回	歩行補助具	歩行補助具の分類と使用方法、杖歩行の指導
11回	車椅子	車椅子の分類と使用方法、車椅子駆動の指導
12回	体験演習	杖歩行と車椅子駆動の体験演習
13回	介助法	基本動作の介助法（床上動作）
14回	介助法	基本動作の介助法（車椅子移乗）
15回	介助法	基本動作の介助法（歩行、階段昇降）

成績評価	定期試験：筆記試験90% 小テスト10%	受講上のルール・留意点	授業中は私語を謹んで授業に集中する。 実技では動きやすい服装を準備する。また空いた時間は繰り返し復習する。
------	-------------------------	-------------	--

課題やレポートに関するフィードバック	
フィードバックは全体に行う。	

教科書	標準理学療法学 日常生活活動学・生活環境学 第5版	著書名 鶴見隆正、隆島研吾編集	出版社名 医学書院
参考書	日常生活活動 第2版	千住秀明監修	神陵文庫
オフィスアワー	担当授業の前後		

科 目	理学療法研究法	単位・時間数	1 単位・ 15 時間
担当講師	齋藤 雄	学 年	2年、後期
実務経験	資格：理学療法士	経験年数	病院：10年 老健：4年

教育目標	研究論文の内容を理解し、要約できるようになる。 必要な資料を検索し、収集することができるようになる。
教育内容	講義と課題

講義内容

回数	項 目	講 義 内 容
1回	研究の概要①	研究とはなにか
2回	研究の概要②	研究を始めるための準備
3回	研究デザイン①	研究デザインの基礎知識
4回	研究デザイン②	研究方法について
5回	文献検索	文献検索の意義と手順
6回	研究計画とバイアス	研究テーマの見つけ方とバイアス
7回	倫理と対象者、研究不正行為	倫理申請と研究対象者、研究不正行為について
8回	学会発表と論文執筆	抄録や論文の記載方法

評価方法	文献の要旨（レポート）、課題
------	----------------

教科書 最新 理学療法学講座 理学療法研究法

参考書

科目	理学療法技術論Ⅲ（軟部組織）	単位・時間数	単位・時間
担当講師	畠山 敦	学 年	2年生 後期
実績経験	資格	1985理学療法士免許習得37年目となる。責任者として急性期病院で施設認可を2か所取得(他OTの認可も立ち会う)。主として、急性期の歎卒中患者さんを中心に整形外科等、地域の中核病院を12年ほど経験してきた。平成9年、疼痛治療のため鍼灸の夜学を卒業、同年より日本リハビリテーション専門学校勤務となる。	
	理学療法士・鍼師・灸師		

授業の位置づけ	軟部組織系のインジケーターは痛みのコントロールである。分節間の意立ち直り反応を含めた筋緊張及び張力としての筋膜の関係を疼痛の制御を通して、具体的な運動のへんつかを追いかけていく。姿勢分析、運動分析を含めた動作分析の中で、仮設立証作業の一環として軟部組織の治療手技を学習する。		
到達目標	緊張を痛みの観点でとらえ、弛緩を誘導する。動作分析を姿勢分析・運動分析と連動させ仮設立証作業を行う。		
授業形態	講義		対面授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	筋膜リリース	総論・コースオリエンテーション
2回	深部筋膜リリース	クロスハンドテクニック
3回		腰仙減圧Ⅰ・Ⅱとフォース・フォームクロージャー
4回		横断面リリースと四肢の可動性
5回		後頭頸部リリース プルテクニック上肢・下肢
6回	筋調整(MTA)	総論・疼痛について
7回		トリガーポイントの触察・
8回		上肢基本手技と脊柱
9回		腹部緊張の分布と上肢末端までの筋連結とSwitch back
10回		体幹のトリガーと肩甲帯及び骨盤帯
11回		下肢のトリガーポイントと肢位による中枢の緊張変化
12回		構えによる筋緊張の変化と症状の点綴(傾斜反応と機能的姿勢)
13回	神経モビライゼーション	総論、上肢、正中、尺骨、橈骨神経のモビライゼーション
14回		SLUMP Test
15回	テーピング	トリガーポイントとキネシオテープ

成績評価	レポート課題	受講上のルール・留意点	他者に対する礼儀と配慮、必要であれば補講又は実技練習を設ける
------	--------	-------------	--------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック
メールでの添付にて提出、添削によるフィードバック

教科書	書名	著書名	出版社名
	系統別治療手技の展開	奈良歎・黒澤和生・竹井仁	共同医書
参考書			
オフィスアワー	担当授業の前後		

科目	理学療法技術論IV-A	単位・時間数	1単位・ 30時間
担当講師	水口 健一	学 年	2年生 後期
実績経験	資格	現在も施設勤務にて、治療経験を活かした授業を行っていきたい	
	理学療法士		

授業の位置づけ	臨床セミナーの一環として、臨床的に使われるPNFの手技について実技を中心に理解する	
到達目標	運動療法 PNF を理解する	
授業形態	講義及び演習	対面

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	PNF (1)	総論
2回	PNF (2)	肩甲帯の基礎パターン
3回	PNF (3)	骨盤帯の基礎パターン
4回	PNF (4)	上肢の基礎パターン
5回	PNF (5)	上肢の基礎パターン
6回	PNF (6)	下肢の基礎パターン
7回	PNF (7)	下肢の基礎パターン
8回	PNF (8)	頸部体幹のパターン
9回	PNF (9)	特殊テクニック
10回	PNF (10)	特殊テクニック
11回	PNF (11)	マット動作でのPNF
12回	PNF (12)	マット動作でのPNF
13回	PNF (13)	歩行訓練とPNF
14回	PNF (14)	歩行訓練とPNF
15回	PNF (15)	呼吸とPNF

成績評価	レポートまたは筆記試験、レポート	受講上のルール・留意点	授業時間数の3分の1を超えて欠席した者には単位を与えない
------	------------------	-------------	------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック

課題やレポートに関するフィードバック

	書名	著書名	出版社名
教科書	PNFハンドブック 柳澤健 他訳 丸善出版(株)		
参考書	PNFコンセプト 監訳 市川繁之 ガイアブックス		
オフィスアワー			

科 目	臨床見学実習	単位・時間数	2単位・90時間
担当講師	理学療法学科教員	学 年	2年生通年
実績経験	資格 理学療法士	実務経験 総合病院・整形外科クリニック・老健・訪問リハ・デイケア・教育機関他	

授業の位置づけ	臨床見学実習Ⅰは入学後、理学療法士の施設での役割や仕事内容を見学することにより、自身の将来像を思い描き、4年間の学習の糧となることを目的とする。 臨床見学実習Ⅰでは主に介護老人保健施設や通所介護・リハなど福祉領域の見学実習となる。
到達目標	1. 臨床現場の理学療法士の役割、具体的な仕事内容を説明できる。 2. 病院・福祉現場で働く専門職としての心構えを理解し、説明できる。 3. この見学から何を得て、今後何に取り組むべきかを明確にし、説明できる。 4. 利用者とのコミュニケーションを通じて、理学療法士に求められるものを学ぶ。
授業形態	実習

授業計画

実習前・臨床実習・実習後の学習上の注意点

実習前

- ①実習の実施方法を確認し、効果的な実習を実施できるように準備する。
 ②各授業の教科書や講義資料のポイントを実習前に整理し、確認すること。
 ③コミュニケーション技能、実技練習を入念に実施し、実習に備えること。

見学実習

- ①臨床現場では理学療法分野だけでなく、多職種連携を常に思い浮かべて、広範囲の知識と技術を体系的に学んでいく。
 ②臨床現場では積極的に様々なことを体験、見学するように努めること。
 ③習得した知識は毎日書類（ポートフォリオ）として記録すること。

実習後

- ①実習後発表では、実習中に学んだ点を整理し、発表すること。
 ②面談後は成果物を書類にまとめ、提出すること。

成績評価	実習地評価、実習後発表をもとに総合的に判断する。	受講上のルール・留意点	原則、遅刻、早退、欠席は認めない。
------	--------------------------	-------------	-------------------

課題やレポートに関するフィードバック

実習地での課題やレポートのフィードバックは実習地で実施する。
 実習終了後、教員からもフィードバックを実施する。

教科書	書名 配布資料	著書名 学校資料	出版社名
参考書			
オフィスアワー	担当教員への連絡は電話またはメールで隨時可能		

科目	医学倫理	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	千田 佳遠里/阿部 靖他	学年	3年生 後期
実績経験	資格 学士／理学療法士	リハビリテーションセンターにおいて、患者支援を担ってきた経験に基づき、実例を交えながら講義を実施する。	

授業の位置づけ	<p>この授業では医療現場で求められる身体的・精神的・社会的な機能を理解し、その特徴に基づく行動規範を説明できるようになることを目的とする。幅広い世代で医療を実践するために、各年代での機能の特徴を理解し、行動を実践するためのプロフェッショナルの視点を持つための基礎を築くことが求められる。</p> <p>1. 医療人に求められる倫理観と行動規範について理解する。 2. 患者学について理解する。</p> <p>社会学、哲学、倫理学を学習したことのある学生は復習をしておくこと。</p>		
到達目標	<p>医療人として医療・福祉現場で求められるプロフェッショナルな行動規範を説明することができる。 理学療法士に必要な情意面について説明することができる。</p>		
授業形態	講義		対面と遠隔の併用授業

授業計画

回数	項目	担当教員	講義内容
1回	総論	阿部	医療現場に必要な倫理観について
2回	capability	土手	理学療法現場に必要な倫理観、行動規範について
3回	capability	土手	理学療法現場に必要な倫理観、行動規範について
4回	患者学	河邊	患者を取り巻く精神的・社会的背景について
5回	患者学	河邊	患者を取り巻く精神的・社会的背景について
6回	リハビリテーションと社会学	千田	リハビリテーションは人間の尊厳と社会性を取り戻す働きかけ
7回	関係の科学社会学	千田	社会の概念、集団の概念・類型、社会学の対象領域、医療社会学
8回	コミュニケーション論	千田	コミュニケーションのとり方、他者との出会い、グループワーク
9回	コミュニケーション論	千田	効果的コミュニケーション、グループワーク、自己開示、相互理解
10回	社会的人間	千田	社会的人間の形成、社会化の概念、文化の概念、言語的社会化
11回	社会的人間	千田	文化の構造・機能、パーソナリティーの形成、社会化のメカニズム
12回	社会学で考える人権	千田	感性で捉える人権、人権とは何か、人権の三本柱、グループワーク
13回	社会学で考える人権	千田	差別の本質・構造、差別行為、多様性と異質性を受け入れる共生社会
14回	まとめ	土手	臨床で求められる倫理観とコミュニケーション
15回	まとめ	土手	臨床で求められる倫理観とコミュニケーション

成績評価	レポート	受講上のルール・留意点	授業時間の3分の1以上欠席した者には単位を与えない
------	------	-------------	---------------------------

課題やレポートに関するフィードバック
レポートを添削、評価したものを作成して返却

書名	著書名	出版社名
教科書	概要を冊子にしたもの	
参考書	放送大学 社会学入門、人権読本-じんけんの詩	森岡清志、他 今野俊彦編著
オフィスアワー	授業前後の休憩時間	

科 目	情報科学Ⅱ	単位・時間数	1 単位・15 時間
担当講師	理学療法学科教員	学 年	3 年、前期
実務経験	資格：理学療法士	経験年数	

教育目標	症例情報をまとめ、適切な資料を作成できる
教育内容	症例情報の整理、説明資料を作成する。 論理的な文章の基本を知り、説明することができる。 医療現場の記録の基本を学ぶ。

講義内容

回数	項 目	講 義 内 容
1回	ICFの活用	ICFの復習、症例情報の整理と把握
2回	基本動作・ADLの分解と統合	問題となる動作を相分けし、問題点を各検査測定結果と統合するイメージをつかむ
3回	基本動作・ADLの分解と統合	問題となる動作を相分けし、問題点を各検査測定結果と統合するイメージをつかむ
4回	ICFを用いた関連図の作成	症例情報を図で表す
5回	レポートの統合と解釈の文 章化	症例情報の関連図を文章化する
6回	レジュメの作成	症例報告の資料を作成する
7回	SOAPの基礎	患者記録の基礎を学ぶ
8回	行動分析の基礎	行動を引き出す考え方を学ぶ

定期試験は別日程にて実施

評価方法	授業内の課題およびレポート等 (100%)
------	-----------------------

教科書 無し

参考書 リハビリテーション医学 羊土社

図解 理学療法 検査・測定ガイド 文光堂

科目	小児科学	単位・時間数	1単位・15時間
担当講師	江添 隆範	学年	3年生 後期
実績経験	資格	昭和62年より、小児科医師として病院勤務。治療の経験を活かし、講義を行う。	
	小児科医師		

授業の位置づけ	治療に理学療法、作業療法が重要な役割を果たす小児、思春期の疾患について講義形式で習得する。		
到達目標	小児の正常な発育、発達を知る。小児に特有な疾患を理解する。		
授業形態	講義		対面授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	小児の特性、発達	発達、発育（正常）について、小児保健、小児によくみられる症状など
2回	小児保健、小児の注意すべき症状、治療	新生児の特徴、低出生体重児、遺伝について学び直す
3回	遺伝学、新生児	脳奇形、てんかん、筋疾患（筋シストロフィ症、ミオパチー）など
4回	神経、筋疾患	自閉性障害、AD/HD、先天性心疾患を中心に
5回	心疾患、感染症、呼吸器	小児期に多い感染症
6回	消化器疾患、内分泌疾患	ホルモンの異常による小児疾患、貧血、白血病、血友病など
7回	血液・腫瘍疾患、アレルギー疾患	ぜん息、アトピー性疾患
8回	腎疾患、重症心身障害	腎炎、ネフローゼなど、重症心身障害の定義、身体的特徴と治療

成績評価	筆記試験100%	受講上のルール・留意点	
------	----------	-------------	--

課題やレポートに関するフィードバック

課題やレポートに関するフィードバック

	書名	著書名	出版社名
教科書	PT・OTの小児科学の最新版	医学専門	
参考書			
オフィスアワー	授業後の休憩時間		

科 目	理学療法研究法	単位・時間数	1 単位・ 15 時間
担当講師	齋藤 雄	学 年	3 年、前期
実務経験	資格：理学療法士	経験年数	病院：10年 老健：4年

教育目標	研究論文の内容を理解し、要約できるようになる。 必要な資料を検索し、収集することができるようになる。
教育内容	講義と課題

講義内容

回数	項 目	講 義 内 容
1回	研究の概要①	研究とはなにか
2回	研究の概要②	研究を始めるための準備
3回	研究デザイン①	研究デザインの基礎知識
4回	研究デザイン②	研究方法について
5回	文献検索	文献検索の意義と手順
6回	研究計画とバイアス	研究テーマの見つけ方とバイアス
7回	倫理と対象者、研究不正行為	倫理申請と研究対象者、研究不正行為について
8回	学会発表と論文執筆	抄録や論文の記載方法

評価方法	文献の要旨（レポート）、課題
------	----------------

教科書 最新 理学療法学講座 理学療法研究法
参考書

科目	義肢装具学Ⅰ	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	木下 修	学年	3年生 前期
実績経験	資格	義肢装具士として40年、製作・適合判定に従事しています。 理学療法士として30年、急性期・回復期・クリニック・老健施設・特養・訪問・ディサービスなどに従事しています。	
	理学療法士（30年） 義肢装具士（40年）		

授業の位置づけ	<p>リハビリテーション関連職種では、理学療法士の装具治療に対する役割は重要になっている。 近年では、急性期より装具を治療の一環として処方されている。治療では、使用する装具の装着だけではなく、日常生活動作・応用動作に使用できるように適合・チェックアウトなど治療効果を上げる上で重要な役割を担っている。</p> <p>そこで、より実践的な装具療法を学習し、基礎から応用性のある学習を解説する。 授業方法、義肢装具室で装具を触りながら講義・ディスカッションなどで授業を進める。</p>	
到達目標	<p>基礎疾患を理解した上で、障害と装具の基礎知識を学習する。 治療場面の多様化に対応できるように応用する能力をつける。 装具の概念などの基礎知識と構造と疾患の流れを理解する。</p>	
授業形態	対面 座学：講義 実習（ギブス・弾性包帯）	

授業計画

回数	項目	講義内容	
1回	総論・概念	装具総論・概念・歴史	
2回	各論：下肢装具	下肢装具総論	
3回		長下肢装具	
4回		短下肢装具・シュー・ホン装具	
5回		膝・足関節装具	
6回		その他の装具：免荷装具・股装具	
7回	靴型装具	足部の解剖と機能について	
8回		靴型装具各論	
9回		インソール（足底板）	
10回	体幹装具 頸椎装具 胸腰対装具 腰椎	体幹の解剖・運動の機能について	
11回		頸椎・胸椎・腰椎	
12回		側弯症装具	
13回	上肢装具： 肩・肘装具 手関節・手指装具	上肢の解剖と運動の機能について	
14回		肩・肘・対立・把持装具	
15回	実技	弾性包帯・足底板	

成績評価	授業の出席 テスト レポート	受講上のルール・留意点	積極的に発言をしてください。
------	----------------------	-------------	----------------

課題やレポートに関するフィードバック	
レポート課題は、授業中全体に対しフィードバックし、レポートは個別に対応する。	

	書名	著書名	出版社名
教科書	理学療法テキスト：装具学	石川 朗	中山書店
参考書	義肢装具のチェックポイント	日本整形外科学会	医学書院
オフィスアワー	授業時間以外で質問のある場合には、事前にメールで予約をしてください。		

科目	日常生活活動学Ⅱ	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	木下 修	学年	3年生 前期
実績経験	資格 理学療法士 (30年) 義肢装具士 (40年)	痛肢装具士として40年、製作・適合判定に従事しています。 理学療法士として30年、急性期・回復期・クリニック・老健施設・特養・訪問・デイサービスなどに従事しています。	

授業の位置づけ	<p>人と向かい合うことを基本としている理学療法において、日常生活活動（ADL）は、運動療法とともに大きな領域を占めている。理学療法士にはクライエントの障害とADLとの関連を正しくとらえ、1人1人の生活スタイルにマッチした具体的なADLの指導の実施とQOLを高める視点が求められている。</p> <p>本授業では日常生活活動学Ⅰを土台とし、疾患毎の病態を確認した上で、疾患毎のADLの実践方法を解説する。</p> <p>基本的な杖、その他の歩行補助具、車椅子、移乗介助法を理解しておくこと。</p>		
到達目標	1. 疾患毎の病態を説明できる。 2. 疾患毎のADL指導ができる。		
授業形態	講義・演習・実習		対面授業

授業計画

回数	項目	講義内容	
1回	ADL再考	評価、姿勢・動作分析のポイント、介助法、ポジショニングの復習	
2回	片麻痺①	起居動作	
3回	片麻痺②	セルフケア	
4回	関節リウマチ	ADL注意点、リウマチ体操	
5回	脊髄損傷①	起居動作	
6回	脊髄損傷②	セルフケア	
7回	整形外科疾患①	人工股関節全置換術後	
8回	整形外科疾患②	下肢切断	
9回	神経筋疾患・難病	パーキンソン病、筋ジストロフィー、ALS	
10回	脳性麻痺	起居動作、生活動作の注意点	
11回	内科疾患	呼吸器疾患、循環器疾患	
12回	視覚障害	歩行指導他	
13回	症例検討①	中枢疾患	
14回	症例検討②	整形疾患	
15回	総まとめ	ADL関連の総復習	

成績評価	定期試験：筆記試験100%	受講上のルール・留意点	実技では動きやすい服装（基本は短パン、Tシャツ）の準備をすること。
------	---------------	-------------	-----------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック			
実技に関するフィードバックは実技練習中、練習の後、個別または全体に対して適宜実施する。			

教科書	書名 Crosslink理学療法学テキスト 日常生活活動学	著書名 臼田 滋 編集	出版社名 メジカル ピュー社
参考書	標準理学療法学 日常生活活動学・生活環境学	鶴見 隆正・隆島研吾 編集	医学書院
オフィスアワー	担当授業の前後		

科目	疾患別理学療法 I -A		単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	米村 豊		学年	3年生 前期
実績経験	資格	平成20年から整形外科領域で培った知識と技術を提供するとともに、この経験を活かし学生自身で考え行動できる内容の授業を提供する。		
	理学療法士			

授業の位置づけ	整形外科疾患の理学療法評価・運動療法の知識・技術の習得。		
到達目標	整形外科疾患における理学療法評価・運動療法を考察、説明、実践できる。		
授業形態	対面を基本とする		

授業計画

回数	項目	講義内容	
1回	肩関節疾患		
2回		肩関節周囲炎、腱板断裂などの病態と障害像を学ぶ。	
3回		肩関節疾患の理学療法評価・治療法を学ぶ。	
4回			
5回	肘・手関節疾患	上腕骨外側上顆炎、TFCC損傷などの病態と障害像を学ぶ。	
6回		肘・手関節疾患の理学療法評価・治療法を学ぶ。	
7回	頸部疾患		
8回		頸椎症、後縦韌帯骨化症などの病態と障害像を学ぶ。	
9回		頸部疾患の理学療法評価・治療法を学ぶ。	
10回	胸椎・胸郭疾患	胸椎側弯症、後弯症などの病態と障害像を学ぶ。	
11回		胸椎・胸郭疾患の理学療法評価・治療法を学ぶ。	
12回	腰部疾患		
13回		腰椎椎間板ヘルニア、脊柱管狭窄症などの病態と障害像を学ぶ。	
14回		腰部疾患の理学療法評価・治療法を学ぶ。	
15回			

成績評価	定期試験	受講上のルール・留意点	教科書のほか、配布資料を使用 解剖学・運動学の理解を深めておくこと
------	------	-------------	--------------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック	
適宜	

	書名	著書名	出版社名
教科書	運動器の運動療法	小柳磨毅ほか	羊土社
参考書			
オフィスアワー	なし		

科目	疾患別理学療法 I-B	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	米村 豊	学年	3年生 前期
実績経験	資格	平成20年から整形外科領域で培った知識と技術を提供するとともに、この経験を活かし学生自身で考え行動できる内容の授業を提供する。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	整形外科疾患の理学療法評価・運動療法の知識・技術の習得。	
到達目標	整形外科疾患における理学療法評価・運動療法を考察、説明、実践できる。	
授業形態	対面を基本とする	

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	股関節疾患	変形性股関節症などの病態と障害像を学ぶ。 外科的治療の種類や方法について学ぶ。
2回		股関節疾患および術前・術後の理学療法評価・治療法を学ぶ。
3回		
4回	膝関節疾患	変形性膝関節症などの病態と障害像を学ぶ。 外科的治療の種類や方法について学ぶ。
5回		股関節疾患および術前・術後の理学療法評価・治療法を学ぶ。
6回		
7回	足関節疾患	
8回		足関節捻挫などの病態と障害像を学ぶ。 足関節疾患の理学療法評価・治療法を学ぶ。
9回		
10回	上肢骨折	上肢骨折の病態と障害像を学ぶ。骨折に対する理学療法評価・治療法を学ぶ。
11回	下肢骨折	下肢骨折の病態と障害像を学ぶ。骨折に対する理学療法評価・治療法を学ぶ。
12回	関節リウマチ	関節リウマチの病態を理解し、時期に応じた理学療法評価・治療法を学ぶ。
13回	運動連鎖	運動連鎖の基本を理解し、動作分析や治療への応用について学ぶ。
14回	総復習	
15回		総復習

成績評価	定期試験	受講上のルール・留意点	教科書のほか、配布資料を使用 解剖学・運動学の理解を深めておくこと
------	------	-------------	--------------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック			
適宜			

	書名	著書名	出版社名
教科書	運動器の運動療法	小柳磨穂ほか	羊土社
参考書			
オフィスアワー	なし		

科 目	疾患別理学療法ⅡA		単位・時間数	1単位・ 30時間
担当講師	鈴木 雅男		学 年	3年生 前期
実績経験	資格	実務経験 35年 理学療法士として、一般病院、総合病院、教育機関に常勤として勤務。非常勤として市・区の保健センター、介護老人保健施設、訪問リハビリテーションにて勤務歴があり、急性期から維持期にかけての経験から授業を行う。		
	理学療法士			

授業の位置づけ	<p>この授業では、中枢神経疾患における片麻痺患者の理学療法について学習する。片麻痺患者は脳血管障害によるものが多く、「脳卒中治療のガイドライン」においても急性期から回復期、維持期に渡って多職種による包括的なリハビリテーションが推奨されている。その中で理学療法士が果たす役割は重要であるが、アプローチ理論が完成されていないのが現状である。したがってこの授業では基本的なアプローチ方法に触れ、脳卒中片麻痺患者への理学療法の全体像をとらえることを目的とする。</p> <p>以下の内容を理解する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 脳卒中片麻痺患者の基本的な障害像 2. 急性期、回復期、維持期の理学療法
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 脳卒中片麻痺患者の病態を説明できる。 2. 麻痺の回復と神経系・脳の可塑性について説明できる。 3. 急性期、回復期、維持期の各期の理学療法の目的と方法について説明できる。 4. リハビリテーション医療における安全管理・推進のためのガイドラインに基づきリスク管理ができる
授業形態	講義・演習

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	病態	中枢神経疾患の病態、運動麻痺と伝導路、陽性兆候と陰性兆候
2回	麻痺の回復	神経系・脳の可塑性と麻痺の回復メカニズム
3回	急性期	目的、リスク管理とガイドライン
4回	急性期	ポジショニング、関節可動域練習、ギャッジアップから離床
5回	急性期	片麻痺体験、関節可動域練習の注意点（肩・股）
6回	回復期	痙攣に対するアプローチ、治療の原則
7回	回復期	随意運動の促通（上肢、下肢）、体幹筋の促通
8回	回復期	寝返り、起き上がり、座位バランス練習
9回	回復期	立ち上がり、立位バランス、片脚立位練習
10回	回復期	歩行練習と異常歩行
11回	維持期	身体機能・能力の自己管理方法
12回	合併症	拘縮、異所性骨化、肩手症候群、CRPS
13回	合併症	起立性低血圧、肩関節亜脱臼、プッシャー症候群、嚥下障害
14回	評価	SIASほか
15回	画像	CT、MRI画像の判読

成績評価	定期試験：筆記試験100%	受講上のルール・留意点	授業中は私語を謹んで授業に集中する。 実技では動きやすい服装を準備する。また空いた時間は繰り返し復習する。
------	---------------	-------------	--

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは全体に行う。

教科書	書名	著書名	出版社名
参考書	標準理学療法学 運動療法学 各論 第4版 脳卒中理学療法の理論と技術	吉尾雅春 原寛美 吉尾雅春	医学書院 メディカル
オフィスアワー	質問や在室状況はメールで確認 m-suzuki@nichireha.ac.jp		

科 目	疾患別理学療法Ⅱ-B(高齢者)	単位・時間数	1 単位・30 時間
担当講師	重國 宏次	学 年	3年、後期
実務経験	資格 理学療法士		

教育目標	高齢者における障害の特徴を理解し、評価・治療の基礎を学習する。
教育内容	高齢者の特徴。障害構造と理学療法（評価・治療）

講義内容

回数	項目	講義内容
1回	高齢者総論	高齢者とは、加齢と老化
2回		廃用症候群
3回	高齢者各論	加齢に伴う生理機能の変化
4回		加齢に伴う運動機能の変化
5回		加齢に伴う精神心理面の変化
6回	高齢者の理学療法	高齢者への支援、運動療法
7回		高齢者への支援、運動療法
8回	介護予防	一次予防、二次予防、三次予防
9回		介護予防 課題と今後の展開
10回	ターミナルケア	終末期の関わりかた
11回	ケーススタディ	高齢者、片麻痺患者などの症例検討
12回		高齢者、片麻痺患者などの症例検討
13回		高齢者、片麻痺患者などの症例検討
14回		症例検討発表
15回		まとめ

評価方法	レポート試験：100%
------	-------------

書名 著書名 出版社名

教科書

参考書

ステップス・トゥ・フォロー

P. M. デービス

シュプリンガー・フェアラーク東京

標準理学療法学・作業療法学 老年学 第5版

大内 尉義

医学書院

科目	疾患別理学療法Ⅲ-A	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	有本 邦洋	学年	3年生 後期
実績経験	資格	訪問リハビリ・通所リハビリ13年、教育機関7年	
	理学療法士		

授業の位置づけ	神経筋疾患の病態を把握し、各疾患に対する理学療法を理解する。	
到達目標	各疾患の障害像や理学療法を講義と実技を通して学習する。	
授業形態	講義と実技	対面授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	パーキンソン病	病態と症状、障害像
2回		評価とリスク管理
3回		関連評価の実技
4回		運動療法とADL管理
5回		運動療法実技
6回	脊髄小脳変性症	病態と症状、障害像
7回		評価とリスク管理
8回		関連評価の実技
9回		運動療法とADL管理、運動療法実技
10回	筋萎縮性側索硬化症	病態と症状、障害像
11回		評価とリスク管理
12回		関連評価の実技
13回		運動療法とADL管理、運動療法実技
14回	症例検討	症例情報をもとに障害像を把握するための評価項目を考える。検査結果から問題点を抽出し、統合と解釈を行う。
15回		

成績評価	筆記試験100%	受講上のルール・留意点	授業時間数の3分の1を超えて欠席した者には単位を与えない
------	----------	-------------	------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック

	書名	著書名	出版社名
教科書	標準理学療法学 運動療法学 各論 第4版	編集 吉尾雅春	医学書院
参考書	標準理学療法学 日常生活活動学・生活環境学 脳卒中の機能評価-SIASとFIM [基礎編]	監修:奈良典、編集:鶴見隆正/陸島研吾 千野直一、椿原彰夫	医学書院 金原出版
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

科目	疾患別理学療法ⅣA（呼吸）		単位・時間数	1単位・30時間			
担当講師	塩澤 和人、鍋城 武志		学年	3年生 前期			
実績経験	資格	塩澤 和人 実務経験 15年 理学療法士として、回復期病院、急性期病院、デイサービス、障害者福祉施設、介護予防事業、教育機関に携わった実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う。					
	理学療法士	鍋城 武志 実務経験 18年 理学療法士として、急性期病院、教育機関に常勤として勤務。実務経験を活かし実例を交えながら講義を行う。					
授業の位置づけ	<p>人口構造の高齢化に伴う呼吸器疾患患者の増加は世界的な規模である。慢性閉塞性肺疾患は死亡原因の第3位である。呼吸リハビリテーションは多くのエビデンスが集積され、特に運動療法の継続が重要視されている。</p> <p>本授業では呼吸器疾患の理学療法ができるようになるために、呼吸器疾患の病態、評価、理学療法について実技を交えて解説する。</p> <p>授業方法は「講義」「実技」「ケーススタディを通してディスカッション、グループ発表」を予定している。</p> <p>呼吸器に関する解剖学、生理学を理解しておくことが望ましい。</p>						
到達目標	<p>1. 呼吸器疾患の病態を説明できる。</p> <p>2. 呼吸器疾患に必要な評価項目を列挙できる。</p> <p>3. 呼吸器疾患の理学療法ができる。</p>						
授業形態	講義・演習・実習		対面授業				

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	運動生理学	内部障害理学療法とは、エネルギー代謝と運動
2回	慢性呼吸不全総論	呼吸不全の病態、診断基準、原因、呼吸器の解剖と整理
3回	フィジカルアセスメント	視診、問診、聴診、触診、打診
4回	呼吸機能の評価	スパイログラム、フローボリューム曲線、換気障害の判定、胸部X線写真
5回	呼吸理学療法評価	呼吸困難感、運動耐用能
6回	運動療法①	コンディショニング（口すばめ呼吸、横隔膜呼吸、胸郭可動域の拡張）
7回	運動療法②	全身持久力・筋力トレーニング、運動強度、中止基準、ADL訓練
8回	排痰法	体位排痰法、排痰手技（スクイージング他）、ハーフィング・咳嗽
9回	外科手術前後、酸素療法	胸・腹部手術前後の理学療法、酸素療法の目的・効果・方法、HOT
10回	人工呼吸器	種類、構造、換気モード、病態
11回	演習①	呼吸器疾患のケーススタディ（ディスカッション）
12回	演習②	呼吸器疾患のケーススタディ（発表）
13回	吸引①	講義（意義、感染対策）
14回	吸引②	実技
15回	総まとめ	復習

成績評価	筆記試験100%	受講上のルール・留意点	実技では動きやすい服装（基本は短パン、Tシャツ）の準備をすること。
------	----------	-------------	-----------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック

実技に関するフィードバックは実技練習中、練習の後、個別または全体に対して適宜実施する。

教科書	標準理学療法学 内部障害理学療法学 第2版	著書名	高橋哲也、神津玲、野村卓生編集	出版社名	医学書院
参考書	呼吸リハビリテーションマニュアル－運動療法－第2版	著書名	呼吸ケアリハ学会他編集	出版社名	照林社
オフィスアワー	担当授業の前後				

科目	疾患別理学療法IVB（循環代謝）	単位・時間数	1単位・ 30時間		
担当講師	塩澤 和人、高瀬 慎輔	学年	3年生 前期		
実績経験	資格	塩澤 和人 実務経験 10年 理学療法士として、回復期病棟、急性期病院、デイサービス、障害者福祉施設、介護予防事業、教育機関に携わった実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う。			
	理学療法士	高瀬 慎輔 実務経験 15年 理学療法士として、回復期病棟、急性期病院、デイサービス、障害者福祉施設、介護予防事業、訪問リハ、教育機関に携わった実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う。			
授業の位置づけ	<p>内部障害（呼吸・循環・代謝障害）者は外部からは障害があることがわかりにくい（いわゆる“見えない障害”）ため、周囲の理解が得られにくいという不利益を受けやすい。理学療法では、いかにしたらできるようになるかという障害学的分析に加えて、なぜそのような状態なのか、その症状や症候はどこから来ているのか、医学的情報を収集し、病態生理を理解する症候学的分析も重要である。「症状の正しい観察」こそが臨床理学療法の第一歩であり、観察を通じた患者の理解こそが内部障害理学療法の最大の醍醐味でもある。</p> <p>本授業では、循環代謝障害に対する理学療法について、病態の理解、評価、理学療法等を解説する。</p> <p>授業方法は、「講義」「ケーススタディ」「ディスカッション」「グループ発表」で構成される。</p> <p>循環器系の解剖と生理の概要を理解しておくこと。</p>				
到達目標	<p>1. 各疾患の病態を説明し、評価、理学療法、リスク管理、患者教育ができる。</p> <p>2. 心電図をみて、不整脈の種類とリスク管理を説明できる。</p> <p>3. 適切な運動強度を設定できる。</p>				
授業形態	講義・演習	対面授業			

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	心リハの概要	目的、効果、対象疾患、循環器系の解剖と生理
2回	不整脈と心電図①	心電図の基本事項、刺激伝導系
3回	不整脈と心電図②	心房細動、心房粗動、期外収縮
4回	不整脈と心電図③	重症不整脈、ブロック波形、虚血と梗塞
5回	虚血性心疾患	狭心症、心筋梗塞の理学療法
6回	心不全	心不全の理学療法、運動負荷試験等
7回	大血管疾患	動脈瘤、大動脈解離の理学療法
8回	動脈・静脈疾患	動脈疾患（閉塞性動脈硬化症）、静脈疾患（深部静脈血栓症）の理学療法、腎疾患
9回	代謝疾患①	糖尿病の病態と合併症
10回	代謝疾患②	評価、低血糖のリスク管理等
11回	代謝疾患③	運動療法
12回	代謝疾患④	二次予防、患者教育
13回	ケーススタディ①	心臓リハ、ディスカッション
14回	ケーススタディ②	心臓リハ、グループ発表
15回	がん	がんのリハビリテーションについて

成績評価	定期試験： 筆記試験100%	受講上のルール・留意点	グループ活動では積極的な意見を交換を望む。
------	-------------------	-------------	-----------------------

課題やレポートに関するフィードバック	
課題について、グループ発表を通して他者の意見や教員からコメントを行う。	

書名	著書名	出版社名
教科書	標準理学療法学 内部障害理学療法学 第2版	高橋哲也、神津玲、野村卓生 編集 医学書院
参考書	最新理学療法学講座 内部障害理学療法学	高橋哲也 編著 医歯薬出版
オフィスアワー	担当授業の前後	

科目	疾患別理学療法V-A（小児）		単位・時間数	1単位・30時間			
担当講師	山本 紘靖		学年	3年生 前期			
実績経験	資格	地域の診療所にて12年間勤務し、脳性麻痺を中心とした小児疾患の理学療法に携わってきました。また特別支援学校にて3年間、自立活動の非常勤講師として勤務しました。医療的観点と教育的観点の両面から臨床的な見解を					
	理学療法士						
授業の位置づけ	<p>○あまり馴染みのない分野だと思いますが、本講義を通じて、小児期に原因を持つ疾患および障がいに 対する理学療法が、年齢を超えて対応できることを説明いたします。</p> <p>○また発達の段階において障がいを有する、あるいは有してきている全ての世代の人々の生活機能を改善 することが出来ることを解説いたします。</p> <p>○講義にて小児疾患の特性の確認をした上で、患者動画を使用しグループディスカッションを行</p>						
到達目標	<p>○脳性麻痺や小児整形疾患、筋ジストロフィーなど遺伝疾患、ダウントン症などの染色体異常、低出生体重児 や発達障害など様々な疾患の特性の理解と評価項目と目標の立案ができる。</p> <p>○また家族へのかかわりを療育の観点でとらえ、小児に対する理学療法を理解する。</p>						
授業形態	講義		「遠隔授業」もしくは「対面と遠隔の併用授業」				

授業計画

回数	項目	講義内容	
1回	小児理学療法概論	小児に対する理学療法について療育の観点も含め、理解する	
2回	小児理学療法の特殊性と評価	成人に対する理学療法との共通点や差異について学び、小児理学療法の基本的概念と小児特有の評価について理解する	
3回	人間発達学（運動発達）	正常な運動発達について学ぶ	
4回	人間発達学 (上肢・摂食・姿勢反応の発達)	上肢の発達について姿勢の安定と感覚の発達のかかわりと摂食機能の発達を理解する	
5回	脳性麻痺概論	脳性麻痺の定義などの概論について学ぶ	
6回	痙攣型脳性麻痺(両麻痺)	痙攣型脳性麻痺(両麻痺)の症状や評価・介入について学ぶ	
7回	痙攣型脳性麻痺(四肢麻痺)	痙攣型脳性麻痺(四肢麻痺)の症状や評価・介入について学ぶ	
8回	痙攣型脳性麻痺(片麻痺)	痙攣型脳性麻痺(片麻痺)の症状や評価・介入について学ぶ	
9回	アテトーゼ型脳性麻痺	アテトーゼ型脳性麻痺の症状や評価・介入について学ぶ	
10回	重度心身障害(重度脳性麻痺)	重度心身障害の各ライフステージに合わせた理学療法について学ぶ	
11回	小児整形疾患(二分脊椎等)と筋ジストロフィー症	主な小児整形疾患(二分脊椎等)の各種症状と筋ジストロフィー症について学び、それぞれの疾患に合わせた評価や介入について学ぶ	
12回	染色体異常(ダウントン症候群)	ダウントン症候群などの染色体異常の特徴的な症状について学ぶ	
13回	早産児(低出生体重児・ハイリスク児)	早産児(低出生体重児・ハイリスク児)の評価や発達を促すための介入について学ぶ	
14回	発達障害(発達性協調運動障害)と運動発達遅滞	発達障害(発達性協調運動障害など)や運動発達遅滞について学び、成長発達を促すための配慮点や介入について理解する	
15回	まとめ(練習問題と質疑応答)	国家試験などの練習問題で、小児理学療法について整理していく	

成績評価	学期末に定期テスト実施 成績は定期テストの結果で評価 テストはマークシート形式	受講上のルール・留意点	授業時間数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない
------	---	-------------	----------------------------

課題やレポートに関するフィードバック			
課題やレポートは実施しない。 授業の最後に講義内容に対する質問時間を設ける。 また質問に対する回答は全体にフィードバックする。			

教科書	書名	著書名	出版社名
	イラストでわかる小児理学療法	上杉雅之 監修	医歯薬出版株式会社
参考書			
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

理学療法学科 夜間部

科 目	総合演習Ⅲ－A	単位・時間数	1 単位・30 時間
担当講師	夜間部教員	学 年	3年、後期

教育目標	3年生における専門基礎分野の授業科目で学ぶ医学的・理学的な基礎知識に基づいて、種々の症例ケースを通して医学的・理学療法的な基礎知識の習熟教育訓練を行う。
教育内容	グループワークを通して、問題解決型思考を学んでいく。

講義内容

回数	項 目	講 義 内 容
1回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
2回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
3回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
4回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
5回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
6回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
7回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
8回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
9回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
10回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
11回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
12回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
13回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
14回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
15回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業

定期試験は別日程にて実施

評価方法	出席、試験、授業態度
------	------------

教科書 なし

科 目	総合演習Ⅲ－B	単位・時間数	1 単位・30 時間
担当講師	夜間部教員	学 年	3年、後期

教育目標	3年生における専門基礎分野の授業科目で学ぶ医学的・理学的な基礎知識に基づいて、種々の症例ケースを通して医学的・理学療法的な基礎知識の習熟教育訓練を行う。
教育内容	グループワークを通して、問題解決型思考を学んでいく。

講義内容

回数	項 目	講 義 内 容
1回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
2回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
3回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
4回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
5回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
6回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
7回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
8回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
9回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
10回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
11回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
12回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
13回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
14回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業
15回	PBLチュートリアル	PBLチュートリアルに基づく授業

定期試験は別日程にて実施

評価方法	出席、試験、授業態度
------	------------

教科書 なし

科目	理学療法技術論Ⅰ（関節系）	単位・時間数	単位・時間
担当講師	畠山 敦	学年	3年生 期
実績経験	資格	1985理学療法士免許習得37年目となる。責任者として急性期病院で施設認可を2か所取得(他OTの認可も立ち会う)。主として、急性期の脳卒中患者さんを中心に整形外科等、地域の中核病院を12年ほど経験してきた。平成9年、疼痛治療のため鍼灸の夜学を卒業、同年より日本リハビリテーション専門学校勤務となる。	
	理学療法士・鍼師・灸師		

授業の位置づけ	理学療法の中では一般的な技術であるが、手技療法は、患者様とセラピストを繋ぐ、直接的なインターフェイスである。患者様からの直感的な信頼を得る場面でもあると同時に。知識的な問題は当然ではあるが、その行動にはたしなみといったそのセラピストの価値観が現れる。単関節の問題から運動する問題を身体の変化を体験しながら体は変化するものだと認め、自己研鑽の必要性を感じてもらう。		
到達目標	手技の理解、手の使い方、体の使い方、対象者との位置関係		
授業形態	講義・実習		対面授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	徒手療法総論	オリエンテーション、
2回	Joint Mobilization	肩甲帯、肩
3回	Joint Mobilization	肘と手首
4回	Joint Mobilization	股関節と膝関節
5回	Joint Mobilization	足関節
6回	Joint Mobilization	脊柱と各関節
7回	Joint Mobilization	仙腸関節
8回	上田法総論	末梢からの制御、固有受容器を介した立ち直り反応、
9回	U/E法、L/E法	緊張抑制と相動性運動の効果
10回	N法、SG法、SP法	中枢からの制御、分節化からの立ち直り反応
11回	Postural release	ブロックテクニック
12回	頭蓋療法又はST-CT	頭蓋の操作と身体的変化
13回	上肢	頭頸部と末梢の関連
14回	下肢	頭頸部と末梢の関連
15回	体幹	頭頸部と末梢の関連

成績評価	レポート課題	受講上のルール・留意点	他者に対する礼儀と配慮、必要であれば補講又は実技練習を設ける
------	--------	-------------	--------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック

メールでの添付にて提出、添削によるフィードバック

書名	著書名	出版社名
教科書		
参考書		
オフィスアワー	担当授業の前後	

科目	理学療法技術論Ⅱ	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	若井 索 阿部 靖	学 年	3年生 後期
実績経験	資格 理学療法士	実務経験 総合病院・整形外科クリニック・老健・訪問リハ・ デイケア・教育機関	経験年数 21年

授業の位置づけ	この授業では人間の生涯における発達を身体的・精神的・社会的な機能の視点からその特徴を理解し、説明できるようになることを目的とする。幅広い世代で医療を実践するために、各年代での機能の特徴を理解し、行動を実践するためのプロフェッショナルの視点を持つための基礎を築くことが求められる。 1. 軟部組織の病態生理学を深めていく。 2. 解剖学、生理学、運動学を復習しておくこと。
到達目標	軟部組織（皮膚、筋膜、脈管、神経、筋）の病態生理学から組織の変化を捉え、説明することができる。 治療手技の方法を理解し、説明することができる。 症状へのアプローチ、原因へのアプローチを理解し、説明することができる。
授業形態	講義・演習・実習

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	触診	軟部組織の触診方法
2回	脉の使い方	治療時の脉の使い方
3回	触圧覚刺激法	下肢法
4回	触圧覚刺激法	上肢法
5回	触圧覚刺激法	体幹法
6回	触圧覚刺激法	体幹法
7回	リンパドレージ	上半身のリンパドレナージ
8回	リンパドレージ	下半身のリンパドレナージ
9回	筋膜リリース・神経モビ	運動連鎖からみる筋膜リリース&神経モビライゼーション 上肢
10回	筋膜リリース・神経モビ	運動連鎖からみる筋膜リリース&神経モビライゼーション 下肢
11回	筋膜リリース・神経モビ	運動連鎖からみる筋膜リリース&神経モビライゼーション 体幹
12回	筋組織へのアプローチ	硬結へのアプローチ
13回	筋組織へのアプローチ	筋組織へのアプローチ
14回	筋組織へのアプローチ	筋組織へのアプローチ
15回	まとめ	軟部組織へのアプローチを順序だてて整理する

成績評価	レポート課題100%	受講上のルール・留意点	授業では毎回課題を出しますので、必ず次週の授業前までに提出すること。 実技では動きやすい服装（基本は短パン、Tシャツ）の準備をすること。
------	------------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック

実技実習に関しては、必要であれば指導者から隨時フィードバックされるが、個々にではなく、実習グループ全体に対して行われる場合もある。その他の講義に関する課題でのフィードバックは、担当教員に一任する。

教科書	書名	著書名	出版社名
参考書			
オフィスアワー	メールでの連絡は随时 y-abeb@nichireha.ac.jp		

科 目	理学療法技術論Ⅴ		単位・時間数	1単位・ 30時間
担当講師	鈴木 雅男		学 年	3年生 後期
実績経験	資格	実務経験 35年 理学療法士として、一般病院、総合病院、教育機関に常勤として勤務。非常勤として市・区の保健センター、介護老人保健施設、訪問リハビリテーションにて勤務歴があり、急性期から維持期にかけての経験から授業を行う。		
	理学療法士			

授業の位置づけ	この授業は中枢神経疾患、特に片麻痺患者に対する治療手技を学習するのが目的であるが、完全に確立された治療法はない。それは中枢神経系の傷害部位や程度によっても障害状況が異なること。中枢神経系の機能について不明なことが多いのも関係している。その状況で現在解明され発展してきている神経生理学による姿勢・運動制御をもとに、健康な人の姿勢や運動を理解することが、今後中枢神経疾患患者の姿勢・動作を見ていく上での基礎となると考える。したがってこの授業では、健常人の姿勢・運動を神経生理学的にとらえ、評価し基本動作を誘導していく技術を身につける事を目的とする。 以下の内容を理解する。 1. 姿勢アライメントや姿勢筋緊張の評価 2. 健康人の姿勢制御の理解 3. 健常人の動作様式の理解 4. 姿勢や動作の誘導方法の理解		
到達目標	1. 姿勢制御について理解する。 2. 姿勢アライメントを検査することができる。 3. 姿勢筋緊張を検査することができる。 4. 健常人の基本動作様式を説明できる。 5. 基本動作の操作誘導をすることができる。		
授業形態	講義・演習		対面授業

授業計画

回数	項目	講義内容	
1回	神経生理学的基礎	神経系の発達と姿勢制御、	
2回	神経生理学的基礎	姿勢動作評価の手がかり、key points of control	
3回	神経生理学的基礎	テンタクルとブリッジ、基本姿勢・動作の要素	
4回	評価	背臥位アライメント、姿勢筋緊張、寝返り、起き上がり	
5回	治療、誘導	寝返り・起き上がりのハンドリング、背面への感覚入力	
6回	評価	端座位アライメント、姿勢筋緊張、姿勢反応	
7回	治療、誘導	端座位のハンドリング、座骨からの感覚入力	
8回	評価	立位のアライメント、姿勢筋緊張、立ち上がり	
9回	治療、誘導	立ち上がり・着座・片脚立位のハンドリング	
10回	治療	足底からの感覚入力	
11回	系統的誘導	背臥位→座位→四つ這い	
12回	系統的誘導	四つ這い→膝立ち→立位	
13回	治療、誘導	歩行	
14回	まとめ	各姿勢評価の復習	
15回	まとめ	各ハンドリングの復習	

成績評価	定期試験：レポート100%	受講上のルール・留意点	授業中は私語を謹んで授業に集中する。 実技は時間の限り反復練習する。
------	---------------	-------------	---------------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック	
フィードバックは全体に行う。	

教科書	書名	著書名	出版社名
参考書	プリント配布		
オフィスアワー	質問や在室状況はメールで確認 m-suzuki@nichireha.ac.jp		

科 目	地域理学療法学	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	下村 周平、阿部 靖	学 年	3年生 前期
実績経験	資格 理学療法士	実務経験 総合病院・老健・訪問リハ・デイケア	

授業の位置づけ	この授業では地域包括支援体制に帰属するリハビリテーションについて学ぶ。なかでも、理学療法分野の役割について学び、環境ごとに求められる理学療法の特徴を理解し、説明できるようになることを目的とする。 幅広い環境で理学療法を実践するために、チームアプローチを理解し、その規範に基づき行動するための理解が求められる。		
到達目標	1. 地域包括支援事業について理解し、説明することができる。 2. 地域リハビリテーションについて理解し、説明することができる。 3. その中の理学療法士の役割について理解し、説明することができる。		
授業形態	講義・演習・実習		併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容	
1回	地域リハビリテーションの定義	地域リハビリテーションで求められる考え方と姿勢	
2回	制度の変遷	福祉制度の変遷	
3回	介護保険制度	介護保険の仕組み、問題点、改正の経緯の理解	
4回	障がい者総合支援法	総合支援法制定の経緯(自立支援法とその問題点)	
5回	関連職種との連携	関連職種の役割、連携の意義を理解する	
6回	介護老人保健施設	介護老人保健施設の機能・理学療法士の役割	
7回	介護老人福祉施設	介護老人福祉施設の理解・理学療法士の役割	
8回	訪問リハビリテーション	訪問リハの目的、サービス提供の流れ	
9回	通所リハビリテーション	通所リハの目的、役割	
10回	通所介護	通所介護の目的、役割	
11回	地域包括ケア	地域包括ケアの概念、必要なサービス	
12回	介護予防事業と予防給付	介護保険事業と予防給付の位置づけ	
13回	介護給付	介護給付の内容を理解する	
14回	対人支援技術・家族関係	対人支援法、コミュニケーション技法の理解	
15回	終末期の関わりかた	終末期の患者(利用者)・家族との関わり	

成績評価	レポート課題 100 %	受講上のルール・留意点	特になし。積極的な発言を求めます。
------	--------------	-------------	-------------------

課題やレポートに関するフィードバック

適宜、個人及び全体に実施。

教科書	書名	著書名	出版社名
参考書			
オフィスアワー	メールでの連絡は随時 y-abe@nichireha.ac.jp		

科目	生活環境学	単位・時間数	2単位・30時間
担当講師	望月 彬也	学年	3年生 前期
実績経験	資格	医療機関：15年 リハデザイン：20年 業務経験を活かし、授業に取り入れていく。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	理学療法学を私たちの生活に密着した広範囲な視点から考えることで、日々の暮らしに役立つ理学療法士を教育していく。	
到達目標	生活環境の基礎にある日常生活活動を福祉用具及び住宅の視点から再考し、新しい分野である生活環境学を理解できる。	
授業形態	講義及び演習	対面授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	障害と生活環境	ADL、APDLと生活環境
2回	制度下における福祉用具	介護保険と福祉用具
3回	起居動作とベッド	ベッドの種類と使い方
4回	褥瘡を防ぐ	褥瘡予防用具について
5回	移乗を助ける福祉用具	移乗動作と移乗用具
6回		リフトについて
7回	移動を助ける福祉用具	杖・歩行器・歩行車・シルバーカー
8回		靴と足の障害
9回	車いすについて	車いすの種類・選び方
10回		車いすの介助
11回	排泄と福祉用具	排泄用具の使い方
12回	高齢者と衣服	障害と衣服
13回	制度下における住宅改修	介護保険と住宅改修
14回	住宅改修実例検討	住宅改修の考え方
15回		

成績評価	レポート	受講上のルール・留意点	授業時間数の3分の1を超えて欠席した者には単位を与えない
------	------	-------------	------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック

教科書	自立支援のための福祉用具ハンドブック	書名	著者名・出版社
		監修 加島 守	
		(公財) 東京都高齢者研究・福祉振興財団	
オフィスアワー	授業中		

科目	臨床技術論		単位・時間数	1単位・ 15時間
担当講師	雨宮淳／高橋浩平／桑島泰輔		学 年	3年生 後期
実績経験	資格	実務経験 20年以上 総合病院・整形外科クリニック・地域にて活動している専門家が講義・実技演習をおこなう。 雨宮淳：オーソティックスソサエティー認定フットトレーナー 高橋浩平：リハビリテーション栄養士／リハ栄養学会代議員 桑島泰輔：米国呼吸療法士／神奈川県内部障害リハビリテーション研究会		
	理学療法士			

授業の位置づけ	この授業では栄養、急性期のリハ、足底挿板について、講義と演習を通して概要を解説する。各専門領域からの知識を学ぶことで、多角的な視点を持って情報収集し、観察し、患者の問題点を思考の練習をする。授業方法は講義が80%、演習が20%である。		
到達目標	各専門領域の知識を学び、その内容を説明できるようになる。 各分野に関心を持ち、調べて、思考できるようになる。 自身の体験や臨床の実例を通して、幅広い情報収集力と人間観察力を身につけることができる。		
授業形態	講義・演習		併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容	
1回	足と歩行の評価	概論：足の評価と治療	
2回	足と歩行の評価	評価	
3回	足底板作成	足底板作成	
4回	足底板作成	再評価・修正	
5回	栄養学	概論	
6回	栄養学	臨床での応用方法	
7回	急性期のPT	概論	
8回	急性期のPT	臨床での応用方法	

成績評価	レポート課題 100 % 授業時間数の3分の1以上欠席した者は試験は受験させず、単位を与えない	受講上のルール・留意点	動きやすい服装（半袖、短パン）、観察しやすい服装を用意ください。ジーパンや体の線が見にくい服装は控えてください。 お互いの身体を利用しながら学習をおこないますので、互いに気遣いましょう。 足底板の作成時はご自身の靴を使いますので、紐靴をご用意ください。（普段履いている靴で大丈夫です）
------	--	-------------	--

課題やレポートに関するフィードバック	
毎回、授業の疑問点について、授業シートでFBする。	

	書名	著書名	出版社名
教科書	各回で紹介		
参考書			
オフィスアワー			

科目	臨床実習Ⅰ	単位・時間数	8単位・360時間
担当講師	理学療法学科教員	学年	3年生後期
実績経験	資格 理学療法士		

授業の位置づけ	臨床実習Ⅰは、医療・福祉の施設での検査測定実習と評価実習を通して診療チームの一員として診療に参加し、基本的な理学療法評価能力を修得する。 1. 急性期リハビリテーション、回復期リハビリテーション、地域（老人保健施設、通所施設）リハビリテーション、住宅（訪問）リハビリテーションの実際を経験し、その意義、必要性と役割について修得する。 2. 全人的リハビリテーションを実施する際に必要な知識と技術を修得する。		
到達目標	今までの臨床実習（早期見学実習：1年次、見学実習：1・2年次、検査測定実習：2年次）で積み上げてきたコミュニケーション能力、理学療法検査能力をもとに、指導者のもと理学療法評価を実施し障害構造の理解を深め、問題点の抽出、目標設定、治療プログラムの立案ができる目標とする。 ①理学療法士としての礼儀・礼節・接遇が体現でき、基本的なルールを遵守することができる。 ②医療安全についての基本事項を理解し、実践することができる。 ③状況に応じて、必要なタイミングで指導者やスタッフに連絡・報告・相談ができる。 ④基本的な理学療法実施能力（患者・スタッフ等とのコミュニケーション、医療面接、理学療法、多職種連携）を修得する。 ⑤理学療法で必要なカルテ記載、情報提供書や申し送り書に触れ、実際に体験する。 ⑥診療の現場におけるカンファレンスに参加し、報告できる。 ⑦情報の入手法（論文検索）、適否の判断、診療への応用について、指導者と検証する。 ⑧機会があれば、学会や講習会、講演会等に参加する。		
授業形態	講義・演習・実習		対面授業

授業計画

実習前・臨床実習・実習後の学習上の注意点			
実習前 ①実習担当者と面談し、実習の実施方法を確認し、効果的な実習を実施できるように準備する。 ②各授業の指定教科書等・講義資料のポイント、臨床実習前講義で実施した内容は実習前に整理し、確認すること。 ③コミュニケーション技能、実技練習を入念に実施し、実習に備えること。			
臨床実習 ①臨床現場では理学療法分野だけでなく多職種連携を常に思い浮かべて、広範囲の知識と技術を体系的に学んでいく。 ②臨床現場では積極的に様々なことを体験、見学するように努めること。 ③習得した知識は毎日書類（ポートフォリオ）として記録すること。			
実習後 ①実習後発表では、実習中に学んだ点を整理し、発表すること。 ②発表後は実習担当者と面談し、実習の総括を実施すること。 ③面談後は成果物を書類にまとめ、提出すること。			

成績評価	実習地評価、実習後発表をもとに総合的に判断する。	受講上のルール・留意点	原則、遅刻、早退、欠席は認めない。
------	--------------------------	-------------	-------------------

課題やレポートに関するフィードバック			
実習地での課題やレポートのフィードバックは実習地で実施する。実習終了後、担当教員からもフィードバックを実施する。			

教科書	書名	著書名	出版社名
参考書	臨床実習の手引き	学校資料	
オフィスアワー	担当教員への連絡は電話またはメールで随時可能		

理学療法学科 夜間部

科 目	専門基礎医学演習	単位・時間数	4 単位・60 時間
担当講師	外来講師	学 年	4 年、後期

詳細は、初回授業にて発表

評価方法	
------	--

教科書

参考書

科目	義肢装具学 II		単位・時間数	1単位・ 30時間
担当講師	木下 修		学年	4年生 後期
実績経験	資格	義肢装具士として40年、製作・適合判定に従事しています。 理学療法士として30年、急性期・回復期・クリニック・老健施設・特養・訪問・ディサービスなどに従事しています。		
	理学療法士 (30年) 義肢装具士 (40年)			

授業の位置づけ	義肢学（四肢の切断）の学習は、脳卒中や骨折、呼吸循環などの疾患と比べ学生時に遭遇する機会が少ない疾患になる。また、臨地実習でも担当できる機会は少ない。そのため、学内での学習では構造・部品名、特殊な用語など苦手意識を持つ要因になっている。 講義では、解剖・生理学、身近な医学的知識から導入し、運動学で学んだ動作分析やアライメントを理解して義足の理解へつなげて解説をする。 理学療法評価と治療は、実施すべき項目や義足の構造の学習を開設する。		
到達目標	基礎疾患を理解した上で、切断と義肢の基礎知識を学習する。 義肢の概念・構造などの基礎知識と疾患の治療の流れを理解する。 治療場面の多様化に対応できるように応用する能力をつける。		
授業形態	対面 座学：講義 実習（弹性包帯）		

授業計画

回数	項目	講義内容	
1回	義肢学総論	歴史・概念・義肢の構造	
2回	各論：義足	下肢切断・離断の総論	
3回		義足の特徴	
4回	大腿義足	ソケットの構造・機能	
5回		ソケットのアライメント	
6回	下腿義足	ソケットの構造・機能	
7回		ソケットのアライメント	
8回	膝義足	ソケットの構造・機能・アライメント	
9回	股義足	ソケットの構造・機能・アライメント	
10回	特殊義足	スポーツ義足の構造・機能	
11回	各論：義手	上肢切断・離断総論	
12回		義手の特徴、電動義手、	
13回	下肢切断の理学療法	トレーニング法・応用動作治療	
14回	下肢切断の支給体制	医療保険・障害者総合支援法（身体障害者福祉法）	
15回	実習	弹性包帯・義足の組み立て	

成績評価	レポート・課題の提出 (内容は授業で行ったものをまとめる。) 学期末試験	受講上のルール・留意点	レポート・課題は、疾患や動作分析についての課題提出 レポートの課題量は、1課題に対し500文字以上
------	--	-------------	--

課題やレポートに関するフィードバック
課題は全体にフィードバックします。また、必要であれば個別に対応します。

教科書	書名	著書名	出版社名
	理学療法テキスト 義肢学	石川 朗	中山書店
参考書	義肢装具のチェックポイント	日本整形外科学会	医学書院
オフィスアワー	事前にメール予約で対応します。		

科 目	総合演習IV A～D	単位・時間数	4 単位・120時間
担当講師	夜間部教員	学 年	4年、通年

教育目標	評価、治療に必要な知識と技術の向上。
教育内容	臨床実習を振り返り、適切な検査項目の選択や検査結果の統合と解釈。 問題点の抽出から具体的なプログラムの作成と実施。

講義内容

回数	項 目	講 義 内 容
1回 ～60回	評価実習の復習 症例検討 総合実習の準備 国試対策	グループディスカッション 実技練習等

定期試験は別日程にて実施

評価方法	出席、発表態度
------	---------

教科書 評価学、治療学に関するテキストを持参すること

参考書

科目	臨床実習Ⅱ-A	単位・時間数	8単位・360時間
担当講師	理学療法学科教員	学年	4年生
実績経験	資格 理学療法士	実務経験 総合病院・整形外科クリニック・老健・訪問リハ・デイケア・教育機関	経験年数 20~40年
授業の位置づけ	<p>臨床実習Ⅱは、医療・福祉の施設での検査測定実習と治療実習を通して診療チームの一員として診療に参加し、基本的なリハビリテーション実施能力、理学療法実施能力を修得する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 急性期リハビリテーション、回復期リハビリテーション、地域（老人保健施設、通所施設）リハビリテーション、在宅（訪問）リハビリテーションの実際を経験し、その意義、必要性と役割について修得する。 全人的リハビリテーションを実施する際に必要な知識と技術を修得する。 		
到達目標	<p>今までの臨床実習（早期見学実習：1年次、見学実習：1・2年次、検査測定実習：2年次、臨床実習Ⅰ：3年次）で積み上げてきたコミュニケーション能力、理学療法検査能力をもとに、指導者の指示のもと基本的理学療法が実施できることを目指す。</p> <ol style="list-style-type: none"> 理学療法士としての礼儀・礼節・接遇が体現でき、基本的なルールを遵守することができる。 医療安全についての基本事項を理解し、実践することができる。 状況に応じて、必要なタイミングで指導者やスタッフに連絡・報告・相談ができる。 基本的な理学療法実践能力： (患者・スタッフ等とのコミュニケーション、医療面接、理学療法、多職種連携)を修得する。 理学療法で必要なカルテ記載、情報提供書や申し送り書に触れ、実際に体験する。 診療の現場におけるカンファレンスに参加し、報告できる。 情報の入手法（論文検索）、適否の判断、診療への応用について、指導者と検証する。 機会があれば、学会や講習会、講演会等に参加する。 		
授業形態	講義・演習・実習		対面授業

授業計画

実習前・臨床実習・実習後の学習上の注意点

実習前

- 実習担当者と面談し、実習の実施方法を確認し、効果的な実習を実施できるように準備する。
- 各授業の指定教科書等・講義資料のポイント、臨床実習前講義で実施した内容は実習前に整理し、確認すること。
- コミュニケーション技能、実技練習を入念に実施し、実習に備えること。

臨床実習

- 臨床現場では理学療法分野だけでなく、多職種連携を常に思い浮かべて、広範囲の知識と技術を体系的に学んでいく。
- 臨床現場では積極的に様々なことを体験、見学するように努めること。
- 習得した知識は毎日書類（ポートフォリオ）として記録すること。

実習後

- 実習後発表では、実習中に学んだ点を整理し、発表すること。
- 発表後は実習担当者と面談し、実習の総括を実施すること。
- 面談後は成果物を書類にまとめ、提出すること。

成績評価	実習地評価、実習後発表をもとに総合的に判断する。	受講上のルール・留意点	原則、遅刻、早退、欠席は認めない。
------	--------------------------	-------------	-------------------

課題やレポートに関するフィードバック

実習地での課題やレポートのフィードバックは実習地で実施する。
実習終了後、担当教員からもフィードバックを実施する。

書名	著書名	出版社名
教科書	臨床実習の手引き	学校資料
参考書		
オフィスアワー	担当教員への連絡は電話またはメールで随時可能	

科 目	臨床実習Ⅱ-B	単位・時間数	8単位・360時間
担当講師	理学療法学科教員	学 年	4年生
実績経験	資格 理学療法士	実務経験 総合病院・整形外科クリニック・老健・訪問リハ・デイケア・教育機関	経験年数 20~40年
授業の位置づけ	<p>臨床実習Ⅱは、医療・福祉の施設での検査測定実習と治療実習を通して診療チームの一員として診療に参加し、基本的リハビリテーション実施能力、理学療法実施能力を修得する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 急性期リハビリテーション、回復期リハビリテーション、地域（老人保健施設、通所施設）リハビリテーション、在宅（訪問）リハビリテーションの実際を経験し、その意義、必要性と役割について修得する。 全人的リハビリテーションを実施する際に必要な知識と技術を修得する。 		
到達目標	<p>今までの臨床実習（早期見学実習：1年次、見学実習：1・2年次、検査測定実習：2年次、臨床実習Ⅰ：3年次）で積み上げてきたコミュニケーション能力、理学療法検査能力をもとに、指導者の指示のもと基本的理学療法が実施できることを目指とする。</p> <ol style="list-style-type: none"> 理学療法士としての礼儀・礼節・接遇が体現でき、基本的なルールを遵守することができる。 医療安全についての基本事項を理解し、実践することができる。 状況に応じて、必要なタイミングで指導者やスタッフに連絡・報告・相談ができる。 基本的な理学療法実践能力： (患者・スタッフ等とのコミュニケーション、医療面接、理学療法、多職種連携)を修得する。 理学療法で必要なカルテ記載、情報提供書や申し送り書に触れ、実際に体験する。 診療の現場におけるカンファレンスに参加し、報告できる。 情報の入手手法（論文検索）、適否の判断、診療への応用について、指導者と検証する。 機会があれば、学会や講習会、講演会等に参加する。 		
授業形態	講義・演習・実習	対面授業	

授業計画

実習前・臨床実習・実習後の学習上の注意点

実習前

- ①実習担当者と面談し、実習の実施方法を確認し、効果的な実習を実施できるように準備する。
- ②各授業の指定教科書等・講義資料のポイント、臨床実習前講義で実施した内容は実習前に整理し、確認すること。
- ③コミュニケーション技能、実技練習を入念に実施し、実習に備えること。

臨床実習

- ①臨床現場では理学療法分野だけでなく、多職種連携を常に思い浮かべて、広範囲の知識と技術を体系的に学んでいく。
- ②臨床現場では積極的に様々なことを体験、見学するように努めること。
- ③習得した知識は毎日書類（ポートフォリオ）として記録すること。

実習後

- ①実習後発表では、実習中に学んだ点を整理し、発表すること。
- ②発表後は実習担当者と面談し、実習の総括を実施すること。
- ③面談後は成果物を書類にまとめ、提出すること。

成績評価	実習地評価、実習後発表をもとに総合的に判断する。	受講上のルール・留意点	原則、遅刻、早退、欠席は認めない。
------	--------------------------	-------------	-------------------

課題やレポートに関するフィードバック

実習地での課題やレポートのフィードバックは実習地で実施する。
実習終了後、担当教員からもフィードバックを実施する。

教科書	書名	著書名	出版社名
教科書	臨床実習の手引き	学校資料	
参考書			
オフィスアワー	担当教員への連絡は電話またはメールで随時可能		